

## 現代都市を捉える理論的基盤の探究

—『惑星都市理論』からその先へ—

荒 又 美 陽・大 城 直 樹 (研究代表者)

渡 邊 隼・北 川 眞 也

原 口 剛・仙 波 希 望

林 凌・平 田 周

馬 渡 玲 欧 (共同研究者)

## Research on Theoretical Foundations for Understanding the Contemporary City: *Planetary Urbanization Theories* and Beyond

ARAMATA Miyo, OSHIRO Naoki

This essay is the final product of a nine-person collaboration conducted in 2019–2021; it was written to show developments a year and a half after the joint publication of *Planetary Urbanization Theories* in April 2021. To cover the content and developments according to the order of the book's table of contents, Aramata deals with the rescaling of Paris since the 19th century and the logic of inclusion and exclusion and reported on the current problems that the Grand Paris policy is causing in Paris' suburbs and in Le Havre. Taking N. Brenner's hinterland theory as a clue, Watanabe criticizes 20th century "urban-centrism" and discusses the circuits to non-urban areas with "human-centrism." Kitagawa shows the suburbs of Milan and the movement against highway construction, refugee camps, and Uber from the angle of infrastructure and logistics, and, in his paper, he remarks that such conversation lacks a planetary perspective and showed the possibility of expanding toward extraction and climate change from the relationship with the earth. Haraguchi discusses the necessity of capturing urban planning that extends not only to the land but also to the sea, using ports as a starting point, and criticizes the containerization that is critically related to it, showing that ports have come to present a logistics landscape and that violent exclusion is created there. Semba, while criticizing the fact that postcolonial urban theory did not develop widely in Japan, shows its genealogy, and this paper further argues that the absence of gender urban theory exists in relation to that genealogy. Hayashi discusses the possibility of a relational description of the city, as well as its genealogy, and then deepens the discussion in his paper by connecting it to his own roadside studies. Oshiro reads D. Gregory's spatial theory of Lefebvre and presents a diagram of it. In his paper, he points out that the same Gregory discusses Lacan's influence on Lefebvre, drawing attention to the fact that capital is creating new pulsion and dilution of the "outside" through SNS, VR, and so on. Hirata questions the incorporation of Lefebvre's "right to the city" into policy, and after rereading what rights are from the standpoint of liberalism and post-Marxism and presenting them as changeable, he shows their range. Mawatari reads the "production of nature" from the perspective of urban political ecology and N. Smith's theory of uneven development and connects it to remote island studies. Throughout the paper, the authors confirm that keywords such as operational landscape, logistics, and feminism should be more discussed as perspectives of urban theory.

《共同研究》

# 現代都市を捉える理論的基盤の探究

——『惑星都市理論』からその先へ——

荒 又 美 陽・大 城 直 樹 (研究代表者)

渡 邊 隼・北 川 眞 也

原 口 剛・仙 波 希 望

林 凌・平 田 周

馬 渡 玲 欧 (共同研究者)

## 0. はじめに ——『惑星都市理論』から始めるために

本稿は2019～2021年度明治大学人文科学研究所共同研究「現代都市を捉える理論的基盤の探究——都市研究の再構築のために」の最終成果である。

本稿の執筆者は、2017年に始めた新しい都市理論に関する研究会のメンバーである。村田学術振興財団の助成を受けて<sup>1</sup>、当初は3カ月に1度ほどのペースで継続的に進めていた。その成果は、2018年3月発行の『空間・社会・地理思想』21号における翻訳特集「プラネタリー・アーバニゼーション」(原口・平田編2018)、同時期にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスからシン・ヒュンバン氏を招いて行ったワークショップ、それをもとに翌年3月発行の同誌22号にまとめた翻訳特集「プラネタリー・ジェントリフィケーション」(荒又編2019)、さらに『10+1ウェブサイト』の2018年11月の特集「プラネタリー・アーバニゼーション——21世紀の都市学のために[前編]」(平田・仙波編2018)、翌年6月の同[後編] (平田・仙波編2019)のなかで、広く議論し、発表する機会に恵まれてきた。平田・仙波を中心とする研究メンバーの思いの強さや、それを発信しようとする行動力の高さもさることながら、現代都市研究にあたって新しい理論や視角が広く求められていることも感じる経緯であった。

そのなかで、近年顕著になってきた格差の拡大や貧困、またマイノリティへの暴力など各種の現状に対抗するためには、都市理論を補強することが求められていると考え、明治大学人文科学研究所の助成を受け、改めて全員で研究を進めてきた。それまでの研究成果を含め、一つの到達点として公開したのが、平田周・仙波希望編『惑星都市理論』(以文社2021、以下「本書」とする)である。まずはその内容を簡単に示しておきたい。

タイトルにある「惑星都市」は、英語圏で2010年代以降注目されている「プラネタリー・アーバニゼーション」という概念から取っている。これは、現在はシカゴ大学で教鞭をとっている批判都市

理論の研究者ニール・ブレナー、そして独立研究者として都市研究・マルクス研究を続けているアンディ・メリフィールドが、1970年代に提起されたアンリ・ルフェーヴルの問題意識を引き受ける形で再提示したものである。ルフェーヴルは、都市の中心部が社会的共同性から切り離され、消費の場となっていること、都市をつくっているのがテクノクラートになっていること、それが地球規模に広がって、人びとがその権利と切り離されていることを問題視していた (Lefèbvre 1989)。ブレナーは、ルフェーヴルの予測通りに資本主義が地球規模に透徹されていく現状を再度「都市化」という観点から捉えなおし (eg. Brenner and Schmid 2012)、メリフィールドはそこでの権利のあり方を模索している (Merrifield 2011)。それは、「従来の都市研究を刷新すること」(本書の序:13)を企図していた。本書は、彼らの議論を出発点とし、9人の研究者がそれぞれの立場から引き出せる「理論」を提示することにこだわって執筆された。四部構成であるので、各部を順に紹介する。

荒又は、第一章にあたる「都市のリスケーリングと排除/包摂の論理」において、パリが19世紀以降、そのスケールを適宜変化させており、21世紀に入ってから「グラン・パリ」という新たなスケールを価値づけする試みが行われていること、そしてそれぞれの時代に応じて誰を包摂し、誰を排除するかは選別されており、現在は再生産にかかわる中間層が包摂の対象となっていることを示した。渡邊は、続く章でブレナーの「ヒンターランドの都市化?」を翻訳・紹介したのち、「都市への権利・非都市への回路」において、「後背地」とも訳されてきた「ヒンターランド」の位置づけを研究史的に示したうえで、それがまさに地球規模の都市化のなかで変化している問題の中心にあることを論じている。

第二部では、最初の章「惑星都市化、インフラストラクチャー、ロジスティクスをめぐる11の地理的断章」において、北川はミラノのヒンターランドであったローの町が2015年万博で被った変化から、そのような場を必要不可欠とする「ロジスティクス」の問題に議論を広げ、トリノに近い溪谷における高速列車敷設反対運動、その間で流動化する人びとを管理・監視しようとする難民キャンプ、支援する人びととともに、流動化する労働者の姿を描いている。続く「海の都市計画」では、原口が都市化の議論の中で完全に見落とされていたと言える「海」もまた、コンテナ化、軍事との結びつき、情報化のなかで「空間の生産」と緊密な関係性を保持していること、それが生み出した巨大な構造物が自然災害や疫病に対する脆弱さを露呈したことを論じている。

こうして、議論が多かれ少なかれプラネタリー・アーバニゼーションの実態を示したのちに、第三部は、Storper and Scott (2016) が示した近年の三つの都市理論の動向 (ポストコロニアル都市理論、アセンブリッジ理論アプローチ、プラネタリー・アーバニズム) をベースに、第二部までに見えかけてくる都市形態論を壊していく。仙波による「ポストコロニアル都市理論は可能か」では、ポストコロニアリズムを基にした都市研究ではなく、欧米発信の理論を他の地域が実証するという構図自体を問題にする「ポストコロニアル都市理論」が検討される。アナーニャ・ロイが提起した「中心の転位 dislocating the center」を研究者がどう批判し、それがロイによってどう反論されたかが示される。林は、続く章で知の生産にあたる人々がいかに体制を維持するかを論じたキー・マクファーレンの「千のCEO」を翻訳で示したのち、「出来事としての都市を考えるために」において、都市を形態論では

なく関係論的に論じるために、分析対象を出来事の連鎖として捉える必要性について研究史的な議論とともに論じている。

続く第四部では、「それでも」<sup>2</sup>都市を考えるための手掛かりがいくつか示される。大城による「グレゴリーのルフューヴル『空間の生産』論」では、ブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとる地理学者アレク・グレゴリーが1994年に発表した『地理的想像力』において、アルチュセールやフーコー、あるいはハーヴェイといった他の理論家たちと比較しつつ、ルフューヴルの議論を二つの図式で示したことを紹介している。平田の「都市への権利、ある思想の運命」は、ルフューヴルが提起した「都市への権利」という表現が、フランスにおいて、さらには国際的な場で政策的な用語に用いられている状況を示し、自由主義、ポスト・マルクス主義において「権利」とは何であったかを跡付けるとともに、改めてルフューヴルの意図が考察される。馬渡は、「惑星都市理論における「自然の生産」の位相」において、資本主義体制の中で「自然」もまた生産されていることを論じている。「第一の自然」から社会との関係性の濃い「第二の自然」が作られること、それを「自然－社会」二元論として批判する流れにあって、スミスの『不均等発展』は版を重ねる中でその記述を厚くしていることが示される。

以上のような論考をもってA5判443ページからなる研究書を公刊したのが2021年4月のことであった。問いは開いたままであり、全体を読んで必ずしも「惑星都市理論」とは何であるのかがすっきりと見えてくるわけではない、ある意味で読者への負荷が大きい本であるにもかかわらず、『読書人』(2021年7月16日発行3398号)で堤研二氏、『図書新聞』(2021年11月20日発行3520号)で山口晋氏、日本建築学会によるウェブ研究誌『建築討論』(2022年3月26日公開)で伊藤孝仁氏、『現代社会学理論研究』(2022年、16号、pp.115-120)で山本千寛氏、『日本都市社会学年報』(2022年、40号、pp.239-241)で新原道信氏の好意的な評を得ることができた。現代都市をめぐる問いを共有してくださった方々には、心より感謝するばかりである。

本稿は、本書の刊行から1年半が経過して<sup>3</sup>、「その先」に何を見出していくかを示すことを目的としている。それぞれの議論がどのように「次」につながるのか、本に対する各所からの批判を含めた意見と、その後の各人の研究を踏まえ、本書が持つ関心の広がりだけでなく、それぞれの論考のつながりについても意識しながら、これからの都市研究の広がり性を示していきたい。本書の執筆順に「その先」を示し、最後に都市研究の今後の可能性をまとめていく。

執筆メンバーとは、COVID-19の蔓延と明治大学を含む各機関による行動制限の中で、2020年3月から2021年11月まで、対面での議論が出来ない状態にあった。それでもその間、執筆メンバーは、2020年9月に大城と仙波が『建築討論』の特集「感染症と都市地理学」に寄稿したこと、また2021年2月には岩波書店『思想』において北川と原口が小特集「採掘－採取ロジスティクス」を組んだこと、2021年5月29日には葛屋代官山店でのトークイベントにおいて平田・仙波・北川・林の4人が登壇したことにより<sup>4</sup>、関係する議論を共同で進めてきた。感染者数が落ち着いていた2021年12月に、ようやく本稿執筆のための研究会をオンライン参加1名も含めて全員で行うことができ、さらにその後も平田・仙波・渡邊が2022年2月に横浜国立大学における都市空間研究会のオンライン座談会で『惑星都市理論』の評価を仰ぐ機会を得るなど、共同作業と議論が続いていることを付記しておく。

## 1. パリのリスケージングとヒンターランド、インフラストラクチャー (荒又)

本書において、荒又論文（以降、本書内の論文は「著者名+論文」の形で示す）では19世紀後半以降、150年のパリのリスケージングが、その時々<sup>の</sup>産業構造に合わせて、排除と包摂を行ってきた仕組みについて分析・考察した。ここでは、そのパリの現状について、他の章で提示された問題との関係性に広げて議論していきたい。

### 1) 脱工業化の都市計画とメガイベント

2016年、パリと周辺3県に複数の基礎自治体を加えた広域の行政組織「グラン・パリ<sup>メトロポール</sup>大都市圏」が発足した。それは、20世紀に進められてきた、郊外開発によって都市を拡大するという巨大都市化からの転換点であり、また近代都市のモデルであったパリが、世界経済との関わりの中で、脱工業化時代のいわば「グローバル・モデル」へのすり合わせを行っていく意思の表れであった（荒又2019）。

パリを含むフランスの大都市郊外は、工業化時代に工場が多く建設され、労働者のための住居が団地として提供された地であった。1970年代に始まる脱工業化とともに、そこでの失業や貧困が次第に問題化されるようになった。1980年代になると、その状況は移民やイスラムと結びつけられるようになり、若者の学業失敗や非行の事例が積み重なるにつれ、移民と宗教、郊外は一体の問題とみなされるようになった。「郊外 banlieue」という表現は、それ自体スティグマ化されるようになった。

パリと周辺部を一体としてみるグラン・パリという発想は、この「都市—郊外」の関係を再構築することを目的の一つとしている。1998年にフランスで開催されたFIFAワールドカップに際し、メインスタジアム「スタッド・ド・フランス」がパリ市郊外のプレーヌ・サン・ドニに誘致されたことは、その重要な起点となった。その周辺はグローバル企業が進出しやすいように整備され、パリ大都市圏第三のビジネスセンターとなった。ただし、そこで新たに生まれた雇用は、地域の失業や貧困を解消するものではなかった。

この状況は、本書第二部で北川が取り上げているミラノ郊外のローと比較しうる。工業化時代に作られた石油精製所が解体されると、ローには見本市会場が建設され、2015年にはミラノ万博会場も設置された。ローは、空港や主要都市からモノが運ばれるための新たな鉄道駅や地下鉄駅、複数の高速道路の建設地となった。他方、住民にとっては、新たな鉄道駅の設置は、既存の駅に停車する鉄道が一日につき32本減るという事態でしかなかった。そしてパリと同じく、地元の人々が新しい見本市会場近辺で雇用されているという実態は見られない。脱工業化の都市計画は、ローの住民の地域への閉じ込めとなったという。

近年、脱工業化による衰退が見られる地区を再開発する契機として、万博やオリンピック、ワールドカップなどの世界的な大規模イベント（メガイベント）が招致されるという傾向は、顕著である（荒又2020a）。ミラノ万博がローの再開発を促進したように、パリではグラン・パリという枠組みを促進するためにオリンピックが招致された。プレーヌ・サン・ドニ地区の西側のプレイエル地区では、選

手村やアクアティクスセンターの建設、それを市内とつなぐ鉄道や高速道路の整備などが急速に進められている。ミラノ万博におけるローと同様、パリの名を冠したイベントのために、周辺都市にそのインフラが重くのしかかっている状況は、伝統的な都市とヒンターランドの関係性をなぞっている。

## 2) ヒンターランドの抵抗

しかし現在のパリにおいて重視すべきは、国家的な都市開発に対して、地域住民がなすすべもなく追いやられているというだけでは決してないということである。この地域では、オリンピック招致決定の直後から、大小の住民団体が力を合わせてオリンピック開発の問題に共同で取り組んでいる<sup>5</sup>。そして、それはわずかずつながら、開発者から譲歩を引き出している。

最初の成功は、単身移民労働者向けの寮フォワイエの移転に関するものである。老朽化し、建て替えられるはずであったこのフォワイエは、選手村の建設地となり、住民全員の退去が求められる事態となった。住民は仮設の住居に移され、さらに選手村の外に建設される住居への移転を待つことになった。短期間での二度の引っ越しを迫られるだけでも負担は大きかったが、転居の条件がいまいなままであることは非常に大きな問題であった。住民は適切な環境への引っ越し、駐車場などの設備の確保、新しい建物に関する協議を求め、運動を起こした。結果、一時は行政と敵対したものの、数カ月の交渉の末、知事との間に住民たちの要求への合意文書が交わされることとなった<sup>6</sup>。

また、住民の家庭菜園の保護運動も認められた。荒又論文でふれたように、郊外住宅地における「労働者菜園」は、19世紀末から20世紀にかけて、労働者の教化のために設けられた。それが今度は、サニールームとフィットネスがついたオリンピック練習用の巨大な水泳施設<sup>7</sup>の建設地となったのである。反対する利用者による占拠活動が行われ、一時は機動隊と向き合う緊張にまで進展したが、裁判所は2022年3月、近年の環境問題のなかで必要以上に緑地を破壊する計画を無効とした。既に工事は始まっていたが、行政は最小限の開発にとどめることを発表した。

2022年9月現在、大きな争点は高速道路のインターチェンジの付け替えである。選手村への交通循環を向上させるのが目的であるが、交通量の多いパリ周辺の高速道路を効率化すれば、地域にはさらなる環境汚染がもたらされるだけでなく、計画されているランプは小学校のすぐそばにある。住民団体は代替案を示すなど、争いを続け、注目も集めている。すでに、プレリエル地区全体の工事計画は、環境負荷が大きすぎるという判断が司法によってなされ、撤回を余儀なくされている (eg. Da Veiga 2021)。

パリ市内で行われる開会式のイメージなどが華々しく発表される中、ヒンターランドであり続けてきた郊外が、それほど注目されないままで、しかし都市の資本の論理に抵抗する場面が見え始めている。北川論文でも、インフラの整備が地域を通過点とすることに徹底的に抗う人びとが紹介されている。トリノーリオン間を結ぶ高速鉄道TAVの建設計画反対運動 (NO TAV) である。費用の問題もあり、全国的に知られるところとなって、中央政府の政権運営への影響もあった (2019年8月11日付『日本経済新聞』など)。これらを一地域の住民運動としてではなく、本書において渡邊が指摘するように、「都市中心主義」のなかでヒンターランドと位置づけられた地域がむしろ開発の対象となってい

く実態を新たに捉えなおす必要があるだろう。

### 3) インフラ整備と都市への権利

フランスにおけるオリンピック反対運動は、必ずしもインフラ整備すべてに反対しているわけではない。「2024年パリオリンピックにノン」(Non aux JO 2024 à Paris)のフレデリック・ヴィアル氏は、オリンピックによって投資が一部に集中し、その他の地域が放置されることを懸念している(荒又2020b)。2010年の「グラン・パリ法」によって、パリ郊外を結ぶ環状鉄道「グラン・パリ・エクスプレス」が建設されることになり、一部で工事が進んでいる。実際のところ、聞き取りをした時点で最初に開通予定であったのは、空港とパリを結ぶ路線と、オリンピック関連施設を結ぶ路線であった<sup>8</sup>。

他方、開発自体については、それまで放置されていた地への投資として、むしろ賛成するとの話もあった。グラン・パリ・エクスプレスの計画は、実際のところ、経済成長のために重要拠点を結びたい国(右派)と、郊外住民への移動手段の提供を重んじる州(左派)の「歴史的合意」(Orfeuil et Wiel 2012)によって進められてきた。荒又論文でも述べたように、交通の条件が整わなかった郊外地域のインフラ整備は、グラン・パリ・エクスプレスに限らず、既存路線に駅を増やしたり、バス路線を整備したりすることで、近年、急速に進められている。

地域の人々の利便性が向上すること自体に、反対する理由はない。しかし、実際の工事においては、住民の立ち退きや土地利用の変更をめぐり、多くの訴訟が起きている。当然ながら、誰の利便性のために、誰が負担を強いられるのかが問われることになる。

グラン・パリには、さらに広域の開発計画もある。2010年に当時のサルコジ大統領が招集した建築家や都市計画家による提案の中で、アントワヌ・グランバックのチームは、パリとセーヌ川沿いの都市であるルーアン、そして河口のル・アーヴルを結ぶ「セーヌ大都市圏」を提案した<sup>9</sup>。ル・アーヴルをグラン・パリの港湾とみなすというアイデアであり、やはり右派にも左派にも受け入れられ、具体化されてきた。2013年には国とイル・ド・フランス州、オート・ノルマンディー州、バス・ノルマンディー州の4者を結ぶ役職が作られ、2015年にはその「セーヌ川流域 (la vallée de la Seine)」の開発整備計画を行うための契約が結ばれた。

その「セーヌ川流域」の公式サイトには、「[「世界都市」パリを海に開くために]と明記されている<sup>10</sup>。2020年までに基礎的な調査を終え、活動は三つの軸に整理されている。1:空間管理と持続可能な開発、2:フローと移動の管理、3:経済開発と高等教育・研究である。2には鉄道と船、港それぞれにインフラ整備計画が示されている。パリへのロジスティクス空間を整備する巨大開発である。まさに本書が批判するプラネタリー・アーバニゼーションの事例といえよう。玉井・待鳥(2016)は、港湾側であるル・アーヴルから見た場合、「その内実はオーソドックスで古典的ともいえる大規模開発プロジェクトへの依存であり、見通しは決して明るいものとはいえない」(玉井・待鳥2016:73)という。ル・アーヴルのような都市部にあってもパリにのみ資する計画としか評価できないのであれば、その間にあるより小さな自治体への悪影響は必至ではないか。

本書第四部の平田論文が示すように、「都市への権利」は生成を続けていくべきものである。オリ



ピック開発に対し、それを押しとどめる論理として環境が重視されているのは、その一端であろう。セーヌ川流域を含めたグラン・パリにおいて、いかなる都市への権利を見出すべきか。それは少なくとも、パリを世界都市にする、あるいはパリの豊かさを享受するというものではないはずである。グラン・パリ政策では、国家が後押しする巨大資本の力をいかに制御するかが問われ続けている。

## 2. 惑星的なものの概念と人新世の想像力——「都市の知」の変容を捉えるために(渡邊)

### 1) はじめに

本書で筆者が担当したのは、ニール・ブレナーによる論文「ヒンターランドの都市化？」の翻訳(Brenner 2016a, 以下「翻訳論文」)、ならびに翻訳論文にもとづく筆者の論考「都市への権利・非都市への回路」(以下「渡邊論文」)である。本稿では、翻訳論文と渡邊論文で展開した論点を整理し、要点を提示する。それをふまえて、惑星的なものの概念にもとづく考察と惑星的なものへの想像力の鍛錬こそが、人新世における「都市の知」の変容を適切に捉えるために肝要であることを論じる。

### 2) ニール・ブレナー「ヒンターランドの都市化？」の論点

まず、翻訳論文の内容を簡潔にみていきたい。翻訳論文は、ブレナー自身の都市的なものの概念にかんする講義にもとづいたものである。ここでまずブレナーは、都市化の問題構成を20世紀のアーバニゼーション／都市化をわれわれの「経験主義的、自然主義的、また疑似環境保護的に都市化を理解する姿勢」から解きほぐす。近年隆盛しているビッグデータなどの技術革新により更新されてきた自然主義的な都市化のモデルに言及し、ブレナーは現代という都市の時代をかたちづくる特徴を「都心部の人口を累積的に増加させてきた傾向の集合」と表現している。きわめて20世紀的な発想にもとづく成長を続ける「肥大都市」への欲望をブレナーは批判的に捉え、都市化のプロセスそれじたいを理論的かつ概念的に考察することの必要性を説く。それにより、「都市の知 (urban knowledge)」という支配的装置下の認識論的裂け目が明らかになるからである。すなわち、第一に都市の不均一化、特殊化、多様化は都市化のプロセスそのものの本質的かつ体系的に生成された特性として認識される必要があること、第二に「都市の成長」と等価とされる「都市化」のみでは非都市という「構成的外部」の説明ができないこと、これらが認識論的裂け目とされる。

それをふまえて、20世紀の都市計画、そして都市計画にかかわったプランナー・デザイナーの認識が問われる。ブレナーによれば、都市の領域が拡大するプロセスでは、都市計画の現代的ディシプリンが統合されたことに関連して形成される懸念が一つであった。同様に重要なことは、資本主義の集積が発展する経路は、資本、労働、商業の主要な中心部から遠く離れた場所に立地する非都市空間の大規模な変化と強く関連していることであった。「ガンジス平野やジャワの密集した町のネットワークからシベリアの不毛の荒れ地やゴビ砂漠の大草原まで(…)非都市空間は、資本主義の不均等発展というグローバル・ヒストリーを通じて、都市を構築するプロセスを支えるために運営されつづけてき

た」のである。

こうした認識をふまえて、以下のように問いが投げかけられる。こんにち都市の状態が外破 (explosion) するなかで、居住ベースの都市化の概念は維持できるのか？ 都市の「現象」をその内部にのみ固定し、限定することはできるのか？ こうした問いに、都市／田舎、都市／農村、内部／外部、社会／自然といった主流派都市理論の静的二元論によって応えることが難しいことをブレナーは示唆する。とはいえ、都市、そして都市理論をとりまく状況もまた不安定化し、困難な時世にある。いかなる都市理論によって、いま一つの都市化のデザインが可能となるのか。

ブレナーは建築家、ランドスケープのデザイナーによる農村、田舎、ヒンターランドといった非都市空間への関心が近年復活し、プラネタリーな都市構造の把握に新しい視角をもたらしうることを指摘したうえで、そうした試みの方向性に対し、ふたつの論点を提示する。それは第一に、いまや都市的なものの外部という以上の意味をもつに至った非都市空間を捉えるためには、都市／非都市を二項対立のかつ形式主義的に区別する既存の枠組みではなく、惑星の様々な領域、ランドスケープ、都市化の生態系の解釈と地図化する新しい方法が必要とされていること、第二に都市化の資本主義的な形態によって非都市空間が高強度で大規模な産業インフラストラクチャー地帯であるオペレーショナル・ランドスケープへと変化し、このオペレーショナル・ランドスケープで資本蓄積の最適条件を設計するために農業、採掘、物流活動の産業的な再設計が必要とされていることである。こうした論点こそが、この惑星において人間が集団的に依存している場所、地域、領域、生態系をつなぎうる方法の確立という課題を強調するものである。

そしてブレナーは、こうした視点が「既存のイデオロギーに対抗するプロジェクト」として位置づけられ、非都市の領域を対象とする都市デザイナーが「新しい認知地図」をつくることに寄与しうるものであると述べる。「新しい認知地図」とは、地球上に不均一に編み込まれた都市の織り目をつまびらかにし、都市の織り目の再設計をめざす人びとに指針を提供しうるようなものである。ブレナーは世界の非都市空間におけるデザインの作用をめぐる考察を通じて、巨大化しつづける都市が人類の不可避な未来をあらわすという前提たる「肥大都市のドグマ」を問いなおすことによるのみ、オルター・アーバニゼーションを想像していくための地平線がひらかれうると翻訳論文は結ばれる。

### 3) 「都市への権利・非都市への回路」の論点

以上の翻訳論文をふまえて、渡邊論文の議論の要点をみていきたい。まず、導入として1節では、近年ブレナーやクリスチャン・シュミットらのプラネタリー・アーバニゼーションを主題として掲げ、研究を進めている論者の議論、広範囲の都市化と非都市空間にかんする議論を中心に概観した。ブレナーらが主題として提示する広範囲の都市化の過程では、従前は都市の「外部」と理解されてきた諸資源の供給元ないし物流などのインフラストラクチャーの場であるヒンターランドが鍵を握っているのは、さきに翻訳論文でも詳しくみたとおりである。20世紀の都市研究では「脇役」にすぎなかったヒンターランドが21世紀の都市を読み解くうえで肝要であることから、翻訳論文および渡邊論文ではこれまでの定訳「後背地」ではなく、「ヒンターランド」という表記を採用することを説明し、プラネ

タリー・アーバニゼーションにおける非都市空間、非都市的なものの概念にかんする議論の前提を確認した。ブレナーらは、20世紀後半以降の都市化の形式の根本的に再編され、あらゆる空間のスケールで広範囲の都市的なものの「内破／外破」がみられるに至ったことを指摘し、あらたな「都市の時代」における非都市空間と非都市的なものの概念の重要性を説く。筆者の論考の目的は、これらのブレナーらの議論の詳細な検討と21世紀の都市研究を進展させるための理論と方法の考察にあった。結論を先取りしていえば、前者の検討を通じて、筆者は後者の問題設定に対し、20世紀の「都市中心主義」の都市研究からの脱却という視座が重要であることを提示した。

さきにみた序論につづく2節「都市研究におけるヒンターランドの系譜」では、翻訳論文の主題であり、これまで日本語圏では「後背地」の定訳で論じられてきたヒンターランドの日本語圏における辞書的な定義を確認した。そのうえで、20世紀の都市研究でヒンターランドをとりあげた、ゲオルク・ジンメル、ルイス・ワース、ハリスとウルマンといった論者の古典的な研究をとりあげて、20世紀の都市研究で都市とヒンターランドがいかに論じられてきたのかを検討した。また古典的な研究のみならず、20世紀後半のグローバル化する都市を論じたサスキア・サッセンもまたニューヨーク、ロンドン、東京といったグローバル・シティを比較検討し、サービス産業のグローバル化とネットワークの増加にともなうトランスナショナルな都市システムの形成と「グローバル・シティの背後の地域」がより重要になっていることを指摘した。これらの20世紀の都市研究における「後背地」への言及に共通する特徴は、いずれの論者においても「後背地」は都市に従属する存在にすぎないこと、都市—後背地が支配—被支配の関係と認識されていたことに見いだされる。こうして都市と「後背地」をめぐる議論そのものが衰退し、21世紀の現在に至っているというのがブレナーの見立てである。

それを受けて3節「広範囲の都市化とヒンターランドの諸相」では、21世紀の都市研究における広範囲の都市化、非都市空間、ヒンターランドの問題をめぐるブレナーの議論を検討した。3節で議論した内容は、さきに内容を確認した翻訳論文「ヒンターランドの都市化？」の内容にもとづくものであるから、ここでは再述をひかえるが、翻訳論文の検討を通じて、21世紀の都市研究、批判的都市理論の中心にヒンターランドを据えることによって、「ヒンターランド」の概念を彫琢するのがブレナーらのねらいであることを確認した。

4節では、プラネタリー・アーバニゼーションを念頭においてブレナーとニコス・カツィキスが中心に進めている都市研究の最新の成果から、広範囲の都市化、ヒンターランドをはじめとする非都市空間と非都市的なものの概念について考察をおこなった。都市とヒンターランドの関係性こそが「現代の都市問題の中心」とするブレナーとカツィキスは、非都市空間のオペレーショナル・ランドスケープからヒンターランドを論じる (Brenner and Katsikis 2020)。そのさいに批判の対象となるのが従来の「都市を中心とする都市研究の支配的なアプローチ」である。この研究アプローチを筆者は「都市中心主義」の都市研究と換言し、結論で後述するように「都市中心主義」の都市研究からの脱却を主張した。こうした研究に対し、ブレナーらが好意的に評価するのは、都市化を「社会代謝的なプロセス」とみなし、「都市の代謝」に注目する「メタボリックな都市化のアプローチ」にもとづく研究である。とはいえ、「メタボリックな都市化のアプローチ」は「都市とヒンターランドの関係を媒介する

ことによって、いかに非都市の空間が再構成されるのか」という問いの設定をこれまで回避してきたことから、ヒンターランドそのものは「ブラックボックス」として、「謎 (enigma)」のまま残されているのが現状である。このヒンターランドという「ブラックボックス」を解き放ち、都市研究の中心的なアジェンダに設定し、再構築する必要が説かれる。ブレナーとカツィキスの考察では、翻訳論文で提示された論点がさらに具体的な問いとして提起されている。

これをふまえて5節では、都市研究の考察対象としての非都市空間への回路をひらくために、プラネタリー・アーバニゼーションの時代における人新世 (Anthropocene) / 資本新世 (Capitalocene) の問題と新しい「認知地図」の作成という論点を中心に検討した。第一の主題であるプラネタリー・アーバニゼーションの時代の人新世 / 資本新世の問題について、ブレナーとカツィキスは、ヒンターランドを都市研究の中心に据えるための鍵概念として資本新世を提示している。資本主義下の「人間中心主義」の立場にも解釈される人新世ではなく、地球上の複雑な生態系にみられる生産 / 再生産、権力 / 非権力といった資本の時代 (the age of capital) の構造を批判的に捉える資本新世の概念を中心に据えるところに、ブレナーらの立場をみてとることができるだろう。第二の主題である新しい「認知地図」の作成は、これまでヒンターランドなどの非都市空間が「ただ空っぽの空間として、世界地図上の空白地」としてのみ「認知」されているにすぎなかった「認知地図」を刷新しようというものである。それは非都市空間が従前の「認知地図」で看過されてきたことを指摘するにとどまらず、ラテンアメリカ、南アジア、中国、アフリカ諸国のヒンターランドで農村から都市への移住を引き起こしている諸問題、すなわち領土の囲い込み、土地利用のありかた、農業、工業、採掘、物流といったインフラストラクチャーへの投資といった問題が、農村地域の持続可能な生活手段と環境を悪化させる「略奪と立ち退きの諸形態」となっていること、そうした現実にもとづく「ひとが農村から都市への移動を選択するのは自然であり、必然的な地球規模の動向」を「物語」で語るべきではないことをブレナーは批判し、現在の都市とヒンターランドにみられる「まだら状の変化」が多種多様な文脈の調整的枠組みや政治的闘争の媒介を果たしていることに注意をうながす。

こうしたブレナーの指摘を引き継いで筆者は、新しい「認知地図」作成の過程で注力すべきなのは、20世紀の「都市への権利」の更新、そして21世紀の「非都市への回路」の開拓であるという論点を提示した。とりわけ20世紀の都市研究の要諦として称揚された「都市への権利」を批判的に検討したうえで、その背景には「都市中心主義」の都市研究が成立しえたのは20世紀という特殊な「都市の時代」を背景として「都市中心主義」という背後仮説が存在した可能性を指摘し、21世紀の都市研究は「都市中心主義」からの脱却をめざすべきであると主張した。

最後に6節では、ブレナーらの議論が現状かかえている問題点をあげたうえで、それらを克服することによってプラネタリー・アーバニゼーション研究、非都市空間の研究の精度が高まることを指摘した。とりわけ21世紀の都市研究では、都市そのものを対象とした研究や都市 / 農村、都市 / 郊外といった二項対立的な認識枠組みでおこなわれてきた20世紀の都市研究のありかたを更新し、広範囲の都市化と非都市空間への着目によって、「非都市への回路」をひらくこと、そして「都市中心主義」「人間中心主義」の都市研究の超克こそが肝要であることを主張した。

#### 4) 惑星的なものの概念のありか／惑星的なものへの想像力のゆくえ

以上でみてきた論点をふまえて、残された研究課題と展望を最後に述べていきたい。もちろん重要な論点、残された課題は多岐にわたるが、ここでは本書の主題をなすプラネタリー・アーバニゼーション／惑星都市理論のうち、とりわけプラネタリー／惑星に焦点を絞って考察をすすめる。

いかなる領域であれ、前世紀末の知的状況と21世紀の現在のそれを比較したとき、もっとも大きな変化としてあげられるのは、脱人間中心主義、あるいは非人間中心主義のモメントであることに疑問の余地はない。筆者の論考で強調した「都市中心主義」の都市研究からの脱却という論点もまたそれに呼応するものであった。ジンメルが「糸」にたとえたように、そもそも都市それじたいが無数の人間（関係）からなる時空間である以上、それは「人間中心主義」となることが運命づけられていた。20世紀の都市研究が「人間中心主義」に依ったものとなるのもまた必然であった。それに加えて20世紀の都市研究は「都市中心主義」という特徴をもっており、21世紀の都市研究は「都市中心主義」からの脱却をめざすべきであることは筆者の論考で主張したとおりである。

脱人間中心主義／非人間中心主義という視点に比重がおかれるのに呼応して、プラネタリー／惑星、あるいは惑星的なものの概念もまた分野を問わず主題としてとりあげられる機会がますます増加している。本書で仔細に論じたプラネタリー・アーバニゼーション、本書と問題関心を共有するプラネタリー・ジェントリフィケーション (Lees, Shin and López-Morales 2016) はもとより、Planetaryを冠した近年の主たる著作だけでも、「プラネタリーな社会思想」を中心に据えて人新世への社会科学のアプローチを模索したナイジェル・クラークとプロニスワフ・シェシンスキの論考 (Clark and Szerszynski 2020) や近年の人新世の議論を主導してきた論者のひとりであるディベッシュ・チャクラバルティの考察 (Chakrabarty 2021) などをあげることができる。

筆者の論考では、20世紀の都市研究でまごうことなき主流であった「都市への権利」の更新とともに、21世紀の都市研究で鍵となるヒンターランドなどの「非都市への回路」をひらくことの重要性を強調した。その論点がきわめて重要であるとの認識は揺らがないけれども、本書の論考では都市—非都市の図式を強調するあまり、都市—農村あるいは都市—郊外といった前世紀の都市研究でおなじみの二項対立的な認識枠組みの陥穽におちいる可能性があることに論考執筆時の筆者はいささか無思慮であった。素朴な二項対立的図式からの脱却なくして「都市中心主義」を超克した都市研究は存立しえない。こうした認識枠組みを回避し、「都市の知」の変容を的確に捉えるための鍵となるのが、プラネタリーに俯瞰し、考察することを通じて獲得する視点であると思われる。いいかえれば、プラネタリーな俯瞰・考察・視点こそが、惑星的なものの概念の要諦である。惑星的なものの概念を起点として考察し、惑星的なものへの想像力をきたえ、やしなうことこそが、人新世における「都市への権利」と「非都市への回路」の道筋を描き、新しい「都市の時代」をつくるための端緒をひらくのである。

### 3. 「まだら状の大地」再考——「惑星工場」という視点から（北川）

#### 1) はじめに——「惑星」が足りない？

筆者の論文「惑星都市化，インフラストラクチャー，ロジスティクスをめぐる11の地理的断章——逸脱と抗争に横切られる「まだら状」の大地」（以下「北川論文」）では，惑星都市化という趨勢を皮切りにしつつも，それをロジスティクス／インフラストラクチャーという枠組みに依拠して検討した。そこから，各地で起こる抗争を意識しながら，都市／農村や中心／周辺といった区分を宙吊りにする現代資本主義の地理についての記述を試みた。（狭義の）都市は，サプライチェーンを通して国境の彼方にある他所と様々に関係しているのみならず，陸と海を覆うロジスティックス／インフラの空間によって縦横に貫かれてもいる。加えて，都市空間そのものがロジスティクスの論理（「ちょうどそのときに，その地点まで」）によって生産されてすらいる。しかし，惑星都市化の地理は，多数の接続や移動，流通を（しばしば力づくで）生み出すというのみではない。この地球を横断する接続の空間によって立ち退きを迫られたり，素通りされたりして，遺棄され，封じ込められるような場所もまた無数に作り出されている。この結果，大地は，国家の領土からなる幾何学模様とは異なり，ニール・ブレナーの言葉を借りれば，「まだら状」(Brenner 2016b) のような様相を帯びた不均等な地理を形作っているのである。

しかしながら，北川論文における「まだら状の大地」という表現にはなおも検討すべき課題がある。それは特に「大地」という表現と関わる。大地とはearthであり「地球」である。「大地」と言うからには，地球という現実がその視野に入っなくてはならないはずだ。言うまでもなく，地球とは「惑星」のことでもある。惑星都市化の惑星という言葉の意味を真にふまえるためには，このような視点が不可欠なのではないか。

ここから，北川論文をより「惑星化」すべく，2つの論点を提示したい。1つ目は，北川論文がなおも水平的な地図の世界を前提としていることに関わる。あるいは，空間を陸として捉え過ぎているとも言えるかもしれない。惑星都市化／ロジスティクス／インフラによる資本主義は，陸に限らず，原口論文が着目した海，そして上空や地下（地底，海底）といった垂直空間をも包摂しているのである。実際，英語圏の地理学などでは，空間を立体的に把握する必要性が近年では様々に指摘されている（Wiezman 2007; Adey 2010; Elden 2013; Steinberg and Peters 2015; Graham 2016; Billè 2020）。

2つ目は，「惑星」と言いながらも，北川論文には，自然や生態系，そして気候変動に関わる論点が欠落していることである。惑星都市化は，馬渡論文や渡邊論文でも言及されるように，人新世，または（正確には，と言うべきか）資本新世と呼ばれる時代状況と大きく関係しており，ロジスティクス／インフラはもとより，採掘－採取による生態系への暴力，あるいは生態系との関係を決して無視することはできないはずだろう。

ここでは，この2つ目の論点を扱う。北川論文のアプローチと共通点を持ちつつも，今後の議論の道標となろう，ニック・ダイアー＝ウィザフォードによる「惑星工場 (planet factory)」(Dyer-Witthford

2018) という概念を取り上げる。

## 2) 「社会工場」から「惑星工場」へ——オペライズモ的道標

北川論文では、惑星都市化を駆動させるロジスティクスの働きを説明するにあたり、「社会工場 (social factory)」という概念に少し触れた。社会工場とは、イタリアのオペライズモ (労働者主義) という 1960 年代の異端派マルクス主義によって提出された概念である。オペライズモは、当時、広がりゆく工場における「大衆労働者」——もっとも価値生産的な主体というより、もっとも戦闘的とみなされた主体——の労働の拒否などの振る舞いにみられる政治的潜勢力に着目してきた。しかし、労働者と資本の敵対性が激化するなかで、工場のような職場のみならず、実際には価値生産の場が社会全体へと広く行き渡っていることが諸主体によって主張されると同時に、資本のほうも工場の壁を越えて社会全体をさらなる生産的領域へと位置付けていくのだった。女性や学生、失業者らから社会賃金の要求がなされる一方で、資本は「一般的知性」に依拠した労働、たとえば「認知労働」の搾取、金融手段を通じた新自由主義的な富の略奪へと舵を切りはじめたのだった。

狭義の生産のみならず、流通、交換、消費をも含めて価値生産的となったとする社会工場論は先進諸国の脱工業化する都市空間の変容、さらにはコンテナ化に象徴される、「ロジスティクス革命」の国境横断的な進展を捉える上で非常に有益なものだった (Hadrt and Negri 2009; Negri e Tomasello 2014; Cowen 2014; Mezzadra and Neilson 2019)。

しかしながら、「社会」というある種の人間中心的領域のみを見据えた視角では、資本新世が語られる時代の資本主義を十分に捉えることはできないのではないか。資本は社会のみならず、地球を包摂し、作り替えている。実際、オペライズモ、その後の「ポスト・オペライズモ」には、エコロジーへの視点が欠けてきたことが、昨今では指摘されている (Nelson and Braun 2017)。ただし、それはオペライズモの階級闘争に基礎を置く戦闘的な理論・方法を、社会のみならず、地球が資本のもとへと包摂される時代のただなかへといかにして翻訳するかという積極的な問題設定においてのことでもある (Leonardi 2017, 2021; Gallo Lassere 2022a, 2022b)。ここにおいて、『サイバー・マルクス』(1999)の著者として知られるダイアー=ウィザフォードは、「惑星工場」という概念を提示したのだと言えよう。

## 3) 「惑星工場」とは

ダイアー=ウィザフォードによると、惑星工場論は、オペライズモの社会工場論に、自然の再生産という資本のまた別の回路を付け加えるものである。それは、無償の資源の源とされた自然であり、無償の廃棄物処理の場とされた自然である。ここには、二重の意味があるという。一つは、商品の工業的生産と密接に絡み合う、サプライチェーンが張りめぐらされた世界市場の活動を指す。言い換えれば、北川論文が焦点を当てた、惑星全体を包摂するロジスティクス/インフラのオペレーションのことでもあろう。もう一つの意味は、こうした活動のなかで生産され、破壊されているのが、気候変動に顕著なように、生物圏そのもの、あるいは地球そのものであるということだ (Dyer-Witheyford 2018)。

ダイアー=ウィザフォードは、論文「惑星工場における闘争——階級構成と地球温暖化」を、以下のような順序で進める。「炭鉱・油田労働者」の話にはじまり、「大衆労働者」、「認知労働」、「反採掘主義者」の議論を経て、「移民・難民」、「新たなプロレタリアート」へ、そして「階級と気候の再構成」を結論として終わる。北川論文と関連する主題も多くみられるが、ダイアー=ウィザフォードは、オペライズモの理論・方法を取りわけ気候変動と関連づけながら、階級主体の変動について論じている。

ここですべては取り上げられないので、北川論文の内容をさらに深める上で有益なポイントを2つ挙げる。

#### a) 化石燃料と抽象空間

ダイアー=ウィザフォードは、闘争こそが資本主義的諸関係に変化を迫るものであるというオペライズモの方法を引き継ぎながら、気候変動の主要因たる化石燃料の使用に目を向ける。資本主義的生産を駆動させる上で、石炭や石油といった化石燃料は必須の物質であり、今もそうあり続けている。ダイアー=ウィザフォードは、19世紀後半以降のカナダ、米国、イギリスなどでの炭鉱労働に言及する。地下深くまで至る極めて危険な労働環境のために、そこでは多くの事故や健康被害が生み出されてきた。しかしまた、こうした労働の危険性、炭鉱町のような単一産業共同体の形成、地下であるがゆえに資本の側が労働力を監督する困難といった条件などから、炭鉱は労働者の敵対性が顕著に表現された場所であったことが強調されねばならない。機械化を進める工業的生産に石炭が普及するほどに、炭鉱労働者は、その供給を妨害・封鎖することで大きな力を得ることができた。1945年以前は特に、工場よりも炭鉱が資本に攻撃を仕掛けられる場所ですらあった。

こうした炭鉱労働者による抗争と対立を受けて、資本は石炭以外の化石燃料へのシフトを迫られる。特に中東の石油への移行は、自動車の生産と消費が担う経済的・政治的重要性のためだけでなく、このような階級的攻勢を回避するためであった。石油の汲み上げは炭鉱ほど労働者を必要とせず、また労働の監督も比較的容易であるという。しかも、ここにはロジスティクスの論理が深く関係している。石油（液体油）は、パイプラインによって輸送可能な物質である。石油は、列車や船舶で運ばれる石炭よりも安価であるのみならず、港湾や鉄道ターミナルなどの難所（choke point）、すなわち労働者のストライキによる封鎖を回避できる資源として好まれたのだ。

しかし、戦争や反乱、石油国有化、労働者のストライキによって、資本からみれば、中東もまた混乱の場となっていく。ゆえに石油企業は、さらに末端的な土地・空間の囲い込みに着手しはじめる。それが海底や熱帯林、北極であり、政治的混乱が起ころうにないと思なされた場所だった。マクニールとエンゲルケの研究（McNeill and Engelke 2014）を参照しながら、ダイアー=ウィザフォードは、掘削のため、海面から600メートル以上に及ぶような超巨大機械装置が各地で建設されていることに触れる。このオフショア石油プラットフォームは、北海、メキシコ湾、ブラジル、ナイジェリア、アンゴラ、インドネシア、ロシアなどの沿岸に点在している。そこでは、大量の汚染物質の漏出が指摘されているし、当然、労働者にとってもそこは極めて危険な環境である（Dyer-Witthford 2018: 79-82）。



ダイアー＝ウィザフォードは、『パイプライン爆破法』(Malm 2021)の著者であるアンドレアス・マルムの議論を参照しつつ、このように石油、さらには天然ガスへと化石燃料の種類が変化し多様化してきたのは、弱体化させられたとはいえ、炭鉱労働者の戦闘性によって、資本がおのれの戦略の改変を迫られてきたからだという。しかし、『化石資本』(2016)の著者であるマルムは、そもそも石炭のような化石燃料が水力に代わって導入されたプロセスの根幹にも階級闘争があったことを強調する。イギリスでは水資源が豊富であったが、都市部からは距離があるために、そうした場所の工場では労働力の確保に四苦八苦していた。しかもこうした場所に機械設備や住宅を整える必要性から、経営側の費用負担が過剰となるのみならず、労働者の拒否やサボタージュもそこでは頻発していた。1830年代になり、資本はこうした地理的、そして労働者が課す政治的制約を超えるために、簡単に操作できない水力から、まるで自由かつ無限に扱えるような蒸気動力へ、つまり鉄道や船舶、パイプラインなど種々のインフラを通して、より可動性を持つ化石燃料へと舵を切ったのだ。マルムがアンリ・ルフェーヴルにならって述べるように、資本による抽象空間の生産——大城論文で詳しく論じられている——を可能としたのは、化石燃料なのである。化石燃料によって、資本は絶対空間からおのれを解放し、莫大な移動性と生産効率を可能とする抽象空間を実現してきたのだ(Malm 2016; Gallo Lassere 2022a)。

付言すれば、化石燃料のみならず、原子力が資本主義のただなかに刻印されてきたことは、今や明々白々である。たとえば、福島第一原発から空気中へ、海洋へと、土地へと放出される放射能は、地球的、惑星的次元で破局的状況をもたらしてきたのであり(Kohso 2020)、惑星工場論にとってこの現実は大きな課題となろう。

## b) 採掘主義と気候変動

ダイアー＝ウィザフォードは、天然資源の採掘に抗う各地の闘争に言及し、それが気候運動と深い関わりを有するようになってきたと論じる。2010年10月にボリビア・コチャバンバで開かれた会議の名称が、それを如実に表している。「気候変動および母なる大地の権利に関する世界民衆会議」。コチャバンバは、多国籍企業による水道事業の私営化に対する闘争の勝利で知られる街であるが、先住民と化石燃料関連企業のあいだの激しい闘いが生じてきた土地でもある。実際、コチャバンバの会議の決議文は、資本による採掘主義に抗う闘争の文脈に、気候変動の問題をはっきり位置付けているという。

反採掘主義は、ラテンアメリカをはじめとするグローバル・サウスで顕著であるとはいえ、今やグローバル・ノースへも広がっている。たとえば、石油のパイプラインの建設・稼働に敵対する闘争である。北米を例に取れば、カナダのオイルサンドと米国のメキシコ湾岸にある製油所を結ぶキーストンXLパイプライン、米国のシェール油産地と再びメキシコ湾岸の製油所を結ぶダコタ・アクセス・パイプラインに抗う闘争などがある。採炭・採鉱、石油汲み上げ、フラッキング(水圧破碎法)、それに不可避的に伴うパイプラインのような固定資本の建設は、土地を略奪しては、汚染、弱体化させ、生活を破壊する。そして、水や森林、動物、農業に甚大な影響を与え、莫大な温室効果ガスを排

出する。ここで付け加えておくと、ロジスティクスに必須のコンテナ船もまた大量の二酸化炭素を排出している。

このような反採掘主義闘争の主体は、先住民や農民であることが多い。それは紛れもなく脱植民地的闘いでもあり、「身体-領土」(Gago 2019)の再生産をめぐる闘い——もちろん、こうした採掘・建設事業に関係する労働者の存在も鍵となろう——でもある。と同時に、採掘主義の世界各地への広がりのなかで、採掘主義が地球温暖化の現実と結び付けられることで、ますます多くの気候活動家が、「闘争の前線」として、反採掘主義闘争に参加するようになってきているのだ (Dyer-Witheyford 2018: 88-90)。

こうした主体は、「ポスト・オペライズモ」が政治的・知的に重視してきた(都市部の)認知労働を担う人びとではない。けれども、デジタル技術と結合する認知資本主義のオペレーションには、莫大な天然資源やエネルギーが必要であることに変わりはない (Leonardi 2017) し、CO<sub>2</sub>排出量はまさしく認知労働の時代にこそ著しく増えてもいる。認知資本主義の背後、否、土台には、このような採掘とロジスティクス/インフラによって裁断された大地、別言すれば、惑星都市化が作り出す「まだら状の大地」が存在しているのだ。

2022年7月25日~29日に、トリノで「気候社会キャンプ (Climate Social Camp)」が開催された。多くの活動家が集まり、活発な議論やデモがなされたようだ。マルムやシルヴィア・フェデリーチも登壇した。北川論文では、トリノ西方のスーザ渓谷でおよそ30年にわたり、様々な直接行動を行いながら巨大インフラ建設、つまり高速列車用線路建設に反対するNO TAVという運動に言及した。この運動には、反採掘主義闘争とでも言いうる側面もあろう (Zibechi 2018)。この7月末に行われたNO TAVのイベント——2005年12月の警官隊との激しい衝突の末の勝利を記念するフェスティバル——に、気候社会キャンプから多くの活動家が参加した。NO TAVの闘争には、すでに環境正義や気候変動への視角が存在してきたとはいえ、今回の両運動の連携は、反採掘主義と気候運動の重なりを確かに象徴していると言えようか。

雑誌『思想』(2021年2月号、岩波書店)上で、箱田徹、原口、北川が協力して組んだ小特集のタイトルは、「採掘-採取、ロジスティクス」であった(北川、箱田 2021)。ここに生態系や気候変動という問いを挟み込むこと、より正確に言えば、惑星都市化、そして「惑星工場」という問題からそれらを捉えていくことが、必要かつ切迫した研究課題となってくるであろう。

#### 4. 海の都市計画——ロジスティクスとインフラをめぐる (原口)

筆者は、「寄せ場」や「ドヤ街」として知られる大阪・釜ヶ崎を主たるフィールドとし、都市下層労働者の労働史や、社会・空間的排除の機軸の解明に取組んできた。その重要な発見の一つは、下層労働者の労働史において港湾労働の比重が極めて大きかったこと、そしてコンテナ化に代表される労働の機械化が釜ヶ崎の空間変容にとって重大な契機となったことだった(原口 2016)。フィールドワーク研究から得られたこの知見を理論的に捉え返すなかで辿り着いたのが、「ロジスティクス」という概

念である。この概念は、「ジェントリフィケーション」という概念と並んで、現代都市の権力分析に欠かせないだけでなく、来るべき批判地理学を展望するための基盤となるように思われる。本書原口論文で試みたのは、そのような試みの第一歩であった。以下では、この概念がもつ可能性を、とくに反五輪運動の経験に照らし合わせながら、筆者なりの視点から展望してみたい。

### 1) ジェントリフィケーションとロジスティクス

2013年のIOC総会において東京オリンピックの開催が決定されて以来、メガイベントに導かれた都市改造へと批判的に介入することは、都市研究の差し迫った課題として浮上した。荒又(2020a, 2020b)が論じたように、ジェントリフィケーション批判の視座は、この課題を探究するうえでまちがいなく中心的である。筆者もまた、反五輪をたたかう活動家と交流するなかで、そのことをいっそう深く確信した。と同時に、かれらとともにオリンピック開催予定地をめぐるなかで、ジェントリフィケーションという視角だけでは捉えることのできない、もう一つの課題が存することに気づかされたのだった。

東京湾岸の開発地帯を一望するとき、最初に目に入るのは、オリンピックの開催予定地とされた人工島であった。その土地は、巨大な競技場やマンション開発の舞台と化していた。だが、よくよく観察してみると、そのまわりにもう一つの「権力の景観」の拡がりに気づくようになった。ガントリークレーンが建ち並ぶコンテナターミナルや巨大倉庫群が、都市のバックヤードと呼ぶべき景観を構成していたのだ。それらは、トスカーノらが「ロジスティクス景観」と呼ぶものにほかならない(Toscano and Kinkle 2015)。

「ロジスティクス景観」の特徴とは、なんだろうか。第一に、その景観は、スペクタクルに満たされた場所性が演出されるオリンピック会場予定地の人口島とは、まったく対照的である。それらの空間は、人間の気配を感じさせないような機械的な様相を呈し、マルク・オジェのいう「非-場所」を表現している(Augé 1994)。

第二に、このように非-場所的であるにもかかわらず、その空間の表象は象徴的な意味をもつことがある。たとえば新聞報道がある国や地域の経済成長を報じる際、大規模コンテナターミナルが稼働する景観を、経済成長の象徴として採用することがある。このようにロジスティクス景観は、しばしば「経済」を視覚的に表わすイメージとして動員される。またそれが、政治的危機を象徴する景観となる場合もある。COVID-19が日本に「上陸」する際、マスメディアの眼がダイヤモンド・プリンセス号に釘付けになったのは、代表的事例だろう。

ロジスティクス景観が現代都市の権力を象徴するものであるとすれば、私たちはどのような理論をもってその景観のうちに分け入っていけばいいのか。この課題は、後述するように、「文化的なもの」に重きを置いてきたポストモダン地理学の認識枠組みに問いを投げかけ、その乗り越えを求めているように思われる。

### 2) 人間への暴力／自然への暴力

また、東京オリンピックの経験のなかで筆者が痛感させられたのは、暴力をめぐる問いの中心性で

あった。メガイベント主導の開発は、まず、人間への暴力を伴うものだった。新国立競技場建設に伴い都営霞ヶ丘アパートに住まう住民は退去を迫られ、明治公園や宮下公園では野宿者の追い出しが繰り返り広げられた。さらに、正当にもオリンピック開発に抗議する者たちに対しては、警察力を動員した、あからさまな暴力が繰り返り広げられた。

もう一つ重要なのは、それが自然への暴力でもあったことである。国内では、オリンピックの勢いを借りて進められた神宮外苑の開発プロジェクトにより約1,000本の樹木が伐採されようとしていることに、抗議の声が広がっている。視点をひろげれば、新国立競技場の建設に供すべくボルネオ島などの熱帯雨林が伐採され、現地の生活が破壊されたことに、国際NGOから非難の声があげられている。そもそも、競技場建設や大規模開発の舞台となった湾岸エリアじたい、廃棄物や土砂で埋め立てて造成された土地であり、海への暴力のうえにたつ土地である。馬渡論文が問うているように人間と自然との関係性を問い、人間＝自然への暴力を同時に捉えることは、必須の課題といえるだろう。

注目したいのは、このような問いは、人新世をめぐる議論と重なり合うことである。ここで、近年翻訳が刊行された二冊の文献を参照したい。ジェイソン・W・ムーアによる『生命の網のなかの資本主義』とアンドレアス・マルムによる『パイプライン爆破法』は、たがいに鋭く対立しながらも、自然と人間の二分法を乗り越えるという共通の課題に向き合っている。ムーアの議論は、空間的回避などのハーヴェイの議論を援用しつつ、資本主義を絶えざるフロンティアの創出と自然の内部化の運動として定義する。そうして、フロンティアを枯渇させてしまった現在、資本主義はこれ以上延命しえないであろうことを結論する (Moore 2015)。

このように人新世の危機の中核に、資本主義の地理的拡大の運動とその限界を見出すムーアの議論は、ハーヴェイやルフェーヴルの議論を基盤にした惑星都市理論と多くの論点を共有している。と同時に、かれの議論が、ハーヴェイと同様の難点を抱えていることも確かである。ハーヴェイおよびムーアの議論は、資本主義に内在する矛盾を鋭く捉える一方で、それに対抗しうる主体や集団性がいかに形成されるのかという問いを欠落させてしまうのだ。これに対しマルムの議論は、ヨーロッパの気候運動や北米のダコタ・パイプライン建設反対運動などの現場を横断し、「下から」の理論を組み立てながら、インフラをサボタージュすることの実践的意義を論じる (Malm 2021)。先住民運動や黒人解放闘争の記憶と経験を呼び覚ますマルムの議論は、地球の採掘とは自然＝人間への暴力であることを力強く例証している。またその議論は、北川論文が提示するような、対抗ロジスティクスの構築可能性を開こうとしているのだといえよう。

### 3) ポストモダン地理学のあとに

これらの課題や可能性を踏まえ、都市研究が向かうべき道筋をどのように開くことができるだろうか。荒山正彦・大城直樹編の『空間から場所へ』(1998)が刊行されてから、四半世紀の時間が過ぎた。同書が切り開いた日本におけるポストモダン地理学の潮流は、一つの到達をみたように思われる。現在は、到達ゆえに浮き彫りになった限界を見定めつつ、新たな理論を生み出していくべきタイミングにあるといえるだろう。また英語圏の地理学を見渡せば、ドリーン・マッシーやエドワード・ソジャ、

ニール・スミスをはじめ時代を率いた論者が逝去するなか、次世代の論者が新たな潮流を生み出していることが注目される。本書の刊行に携わったメンバーの関心の一つは、そのような世界的潮流と同期しつつ、日本国内において新たな議論の基盤を生み出すことであった。

私見では、日本におけるポストモダン地理学運動の重要な到達であり、かつそれゆえの限界を示すのは、「文化」および「場所」という概念であるように思われる。『空間から場所へ』というタイトルが示すとおり、日本における「ポストモダン」とは、デカルト以来の抽象的空間を批判し、「生きられた空間」へと向かう傾向が強かった。またその傾向は、同時期のカルチュラル・スタディーズの隆盛とも連動し、表象や言説など「文化的なもの」のうちに作動する権力を分析する視座を磨いていった。だが他方で、マルクス主義地理学の知見を継承・発展させるという課題に、水岡不二雄による一連の研究を例外として、エネルギーが注がれることは稀であった。むしろこの時代に、ハーヴェイらの視点を「大きな物語」として批判し相対化することが主流であったように思われる。

問題は、文化的な議論だけでは太刀打ちできないような現実が、過去20年のあいだに浮上したことである。とりわけ重大な出来事として、2008年の金融危機や、2011年の東日本大震災および原発のメルトダウンという惨事が挙げられよう。いずれの出来事も、それに向き合うためには、金融資本や建造環境論やインフラ論といった、ハードな権力の分析を必要としている。

筆者の課題に引きつけられれば、たとえば次のようなことである。ジェントリフィケーションの作動は「場所の構築」を伴い、それゆえ文化的なものの分析も欠かせないが、しかしそれだけでは不十分である。リーズらの議論をみれば明らかであるように、惑星的ジェントリフィケーションを分析するうえでは、「資本の第2次循環」をはじめとする資本主義の動態へと分け入っていかねばならない (Lees et al, 2016)。あるいは、ロジスティクス景観とは、非-場所性をなによりの特徴とする。ここで、たとえばコンテナターミナルを考えてみよう。その空間設計は、東アジアであろうと北米であろうと変わらないような、徹底した均質性に貫かれている。なに一つ固有なものをもちぬこの空間は、「没場所性」と断じる以上の分析を許さないだろう。にもかかわらず、原口論文で論じたように、このロジスティクス空間こそ惑星的な権力が作動するうえで中心的な位置を占めている。つまり、場所論にとっては「つまらない」空間をこそ分析し、そこから批判的な知を引き出すことは、もっとも重要な課題であると考えられる。

昨年惜しくも急逝したアナキスト人類学者であり、マルクス主義者ハーヴェイの親しい論敵でもあったデヴィッド・グレーバーは、ペーパーワークというもっとも「つまらない」営為を分析し、金融権力の秘密とは強化された官僚制であるとする斬新な知見を生み出した (Graeber 2015)。そのような議論と歩調を合わせるかのように、2010年代以降のラディカル地理学は、コンテナや監視カメラ、ドローンといった人工的かつ非人間的な対象へと、批判的な力を結集しようとしている。ロジスティクスとは、そのような知的努力のうえに浮上したキーワードである。

最後に、マルクス主義地理学のなかで起きている、重要な地殻変動に触れておきたい。すなわち、マルクス主義とフェミニズムとの関係性である。かつてハーヴェイは、フェミニズムをポストモダニズムの担い手とみなし、その知見を退けた (Harvey 1989)。これに対しかれの理論を受け継いだニール

ル・スミスは、フェミニズムとの共闘を試み、その知を自身の議論のなかに組み入れた。すなわちスミスはフェミニスト地理学からの批判に応え、自身のスケール論のなかに「身体」と「家」を組み入れたのだった (Smith 1993)。現在では、フェミニズムを抜きにして、マルクス主義地理学を論じることはできない。ハーヴェイやスミスの理論的継承者として、ルース・ウィルソン・ギルモアとデボラ・コーエンが挙げられる (Cowen 2014, Gillmore 2022)。かれらの議論を読むとき、筆者は、その批判的な理論の力に驚嘆すると同時に、フェミニズムが共通の基盤となっている事実を痛感させられている。このような議論の展開は、場所論や文化地理学の知見を継承するための、重要な道筋を示しているように思われる。

## 5. ポストコロニアルとジェンダーの「都市空間」における交差性について (仙波)

本書の第六論文「ポストコロニアル都市理論は可能か」が試みたのは、惑星都市理論 (プラネタリー・アーバニゼーション研究)、集合理論的都市研究とならんで紹介される、最先端の都市理論の1つ、「ポストコロニアル都市理論」の含意、射程、そしてその可能性を検討することであった (以下「仙波論文」とする)。ここでは、このポストコロニアル都市理論のアウトラインをいま再び確認したのち、その都市空間におけるジェンダー研究との結節点について議論していきたい。後述するとおり、もとよりポストコロニアル研究はジェンダー研究と表裏をなすものであった。であればこそそれは、いかなるかたちで結びついているのか、そして都市理論を深化させていくためにいかなるジェンダー的視点が有効なのか——先取りしていうなれば、またなぜジェンダー的視点は都市研究において周縁化されていたのか——。これらの問いから、本文で展開した議論をもう一步前進させることが可能となる。

### 1) ポストコロニアル都市理論からの視点

ポストコロニアル都市理論、それは2010年代から隆盛をつづける都市研究の理論的領野の一角を占めるものと評される。アラン・スコットとマイケル・ストーパーは共著論文のなかで、2000年代以降の都市研究における転回の一つにポストコロニアル都市研究的アプローチがあると明言している (Scott and Storper 2015)。この領域のプレイヤーとしてあげられるのが、カリフォルニア大学バークレー校のアナーニャ・ロイ、そしてユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのジェニファー・ロビンソンなどである。経済地理学者のジェイミー・ベックは、このポストコロニアル都市理論への関心が高まる背景に、階級化されたグローバル・シティ論の覇権 (i.e. Friedmann 198; Sassen 1991) に対する批判的な視点を見出した。グローバル・シティ的な理論視角のくびきのもと、世界中の都市は“勝ち組”となるべく「万人の万人に対する闘争」を繰り返している (Peck 2015: 163)。つまり、「トップダウンかつますます規範的になる都市理論のスタイル」に対するカウンターとして、ポストコロニアルなる都市研究が世界中で求められるに至った状況がある (Peck 2015: 164)。

ゆえにポストコロニアル都市理論は、規範的な単一の都市理論構築を企図してはいない。エリッ

ク・シェパードらによる「グローバルアーバニズムを地方化するためのマニフェスト」に明らかのように (Sheppard et al. 2013), デイペシュ・チャクラバルティ (2000) の *Provincializing Europe* (『ヨーロッパを地方化する』未邦訳) に影響を受けたこの理論はむしろ、欧米中心主義的かつ、きらびやかでモダンなグローバル・シティをロールモデルに据える都市理論それ自体に対する異議申し立てである。「単純に普遍化された西洋的議論からは現在の都市的文脈を照らすことはできない」と考えるジェニファー・ロビンソンの議論——その名も「ありふれた都市 *Ordinary Cities*」は「規範」「普遍」をなそうとする旧来の都市研究に対する挑戦であった (Robinson 2004:710)。

重ねてアナーニャ・ロイによれば、旧来からの学知に支配的な「理論の文化」それ自体が地図上のさまざまな都市を理解するために適切であるかを検討することなく、我々は理論を獲得することはできない。だからこそ西洋的なもの自体を作り上げるプロセス自体が、同時にクリエイティブ・シティなどの施策を介して惑星規模で同様の破壊的開発をもたらしているとロイは喝破し、そのうえで「都市的なもの」の未決定性といった理論視角を提起した (Roy 2003)。いわばポストコロニアル都市理論は「都市とは一体何であるのか」という問いの系譜自体に異議をとねえ、様々なアクターをとおしたその問いの累積に「都市化」への欲動の過程を見出そうとするものであるといえるだろう。

## 2) 都市研究におけるジェンダー的視点の欠如

さて、ポストコロニアル都市理論の冠である「ポストコロニアル」領域の研究は、日本ではそもそもカルチュラル・スタディーズの文脈において受容されてきた (花田ほか編 1999)。このカルチュラル・スタディーズの先導者の1人である吉見俊哉は、周知のとおり、極めて精巧な都市論『都市のドラマトゥルギー』(1987) でデビューを飾る。

1980年代以降隆盛した都市論の先駆にも数えられる同作もしかし、空間における「ジェンダー」的位相に関しては意外なほどに言及がない。吉見は自らの領域横断性について意識であったといえるが、少なくとも「都市研究 *Urban Studies*」——必ずしも「都市社会学」ではないかもしれないが——の一角を占めているこの作品に「ジェンダー」的視点の不在を指摘するのは、フェアではないかもしれない。しかしこうした「不在」は、とりわけ日本の都市研究を担ってきた都市社会学の領野でも同様である。それは本文で論じた都市研究における (かつての)「ポストコロニアリズム」の「不在」と同様の観を呈している。

そもそもここ10年の日本都市社会学学会大会では、ジェンダーと関連すると考えられる報告が計6件、学会誌での論文掲載に至っては4本である。少なくとも学会内のモラルとして、「ジェンダー」的視点を取り入れた研究成果が多く出ているとは言い難い。しかし一方で、都市研究におけるジェンダー的視点の重要性であるのは論を俟たない。遊郭史や廃娼運動の研究など、性的抑圧にまつわる地理的構造の解明に関しては日本語圏においても一定程度の蓄積がある (e.g. 林 2017)。

吉見自体も、かの演劇論的アプローチを採用するなかで意識していた、都市、空間、そして身体をめぐる問題系においてジェンダーが決定的な因子となることを指摘したのは、ラトガース大学のエリザベス・グロスである。

「都市は（性別によって差異化された）身体性の社会的生産におけるきわめて重要な要因の一つである。建築環境がもたらすのは、現代の西洋および今日では東洋のほとんどにおける身体の形態の文脈と座標であり、20世紀が田舎を「農村」と定義する限りにおいて、農村における身体でさえも、都市開発を下支えするもの、ないしは原材料として提供するものとなっている。都市は、土地や景観のイメージを構築するための決定的な用語となり、また、経済的／社会的／政治的／文化的な交流の概念や「自然の生態系」の概念の中心となる参照点をなしたうえで、「自然の生態系」という概念の中心となっている。」(Grosz 1992: 242)

きわめて示唆的なこの言葉にあるとおり、まさに『惑星都市理論』での議論に容易に接続しうるかたちでの、ジェンダライズされた身体性と都市空間のつながりをグロスが看破していた。けれども、たとえば都市社会学の代表的テキストの1つに数えられる『都市の社会学』（町村・西澤 2000）ではジェンダーへの言及は皆無といってよく、また同じ有斐閣から刊行された昨今のテキストでもLGBTQ+スタディーズへのわずかながらの言及は見てとれるものの、テーマの一部としてジェンダーを採用しているとは言い難い（松本 2014）。

しかしなぜ（日本の）都市社会学はこのような示唆を引き受け、主題の中心の1つに据え置いてこなかったのだろうか。それはクローゼットのなかに閉じ込められたままなのか。

### 3) フェミニズム地理学の系譜とその限界

こうした状況は、都市研究の領野で隣接する人文地理学——とりわけ都市社会地理学においてはまた変わってくる。ピーター・ジャクソン（1989）の『文化地理学の再構築』ではその5章が「ジェンダー（社会的性差）と性意識」に割かれており、またポール・ノックスとスティーヴン・ピンチ（2010）による『都市社会地理学』でも「第11章 身体・セクシュアリティ・都市」といった章が確認できる。元来、日本の都市・人文地理学における1つのメルクマールとされる『都市空間の地理学』（加藤・大城編 2006）は、その第16章が「フェミニズム地理学」である。

このフェミニズム／フェミニスト地理学は、先に挙げたグロスのように空間とジェンダーのつながりを念頭におきながら、「ジェンダーをその位置や状況、時代や場所において変化する、部分的で状況づけられた知（situated knowledge）」と定位し、翻って「場所がジェンダー的、性的、身体的アイデンティティの生産と再生産にとって重要な役割を担っていること」や、「そこにおいて排除と抑圧の地理が展開すること」を明るみに出してきた（寄藤 2012: 248）。1990年代中葉からの、吉田容子らによる精力的な紹介を介して（吉田 1996）、フェミニズム／フェミニスト地理学が日本の都市研究に一定程度の蓄積をもたらしたことは指摘に値する（e.g. 影山 2004）。

しかし2010年代以降、こうしたジェンダーと地理・都市研究に射程をおく研究がさらなる展開を見せたとは言い難い。福田珠己（2018）による「ホーム」の文化地理学的研究などを除けば、新たな議論が展開された跡は管見の限り見当たらない。身体性の社会的生産における都市空間の様相、およびそこに垣間見える排除と抑圧の地理は、少なくとも現代社会において解決されたとは言い難い。2020年の惑星的パンデミック以降、何を「エッセンシャル」とみなし、またそれがいかにかつて女性にの



み押し付けられてきた「ケアワーク」と表裏しているかが、以前より明瞭なかたちで眼前に立ち現れているにも関わらず—。

昨今のLGBTQ+スタディーズの隆盛を見るにつけ、またはインターセクショナリティへの関心が高まるなかで、「都市」という変数が後景に退く様を見ているようにも思える。第一に2000年代以降、都市論の元気がなくなり、いまあえて都市論をやろうとするとインフラ論やアクターネットワークセオリー（ANT）的な視点をとらざるをえず、第二にまた最近の元気な都市社会学は個別の 이슈を抱える「まち」を扱っているがために記述対象がワークショップ的になりながらも、最終的には都市のつくり方にワークショップの論理が組み込まれる、という近森（2021: 43）のいささかペシミスティックな指摘のように、つまるところジェンダライズされた身体性と都市空間のつながりはむしろ研究上の視点の上で跡形もなく消え去って（または解決されて）しまったのだろうか。

#### 4) ポストコロナル都市理論とジェンダー研究の交差性

都市空間とジェンダーにおける強いつながりは無論現在においても継続している。しかしもしその指摘のみにとどまることなく、空間の理論を更新させることができるとすれば、それはいかなる方法論によってだろうか。最後にもう一度アナーニャ・ロイの議論に立ち戻り、ジェンダー研究とポストコロナル都市理論が相補的に「理論の地図」を更新するための視座を提示しうる、その可能性について議論したい。

ロイは長距離通勤を強いられている移民を対象とした調査において、「生活の女性化“feminization of livelihood”」という視点から空間的に階層が固定化されるメカニズムについて分析した。いわゆる「女性の貧困」というカテゴリー自体がいかにして構築されるに至るか、といった過程の側面に着目しながら、まさに「道具立て toolkit」としての「ジェンダー」をロイはその研究に用いている（Roy 2003: 19）。その時ロイが大きく依拠しているのがジェーン・スコットの議論であった。

そしてスコットはまさにこのジェンダライズされる局面における「過程」を重要視している。

「私たちは、自分たちの分析方法を厳しく吟味し、作業仮説を明確にし、変化はどのようにして起きると考えているかを説明する必要がある。単一の起源を求める代わりに、解きほぐすことができないほど互いに絡みあった様々な過程を考えなければならない。もちろん、どんな問題を研究するのかははっきりさせなければならないし、それが出発点、もしくは複雑に入り組んだ過程への入口となる。だが私たちがたえず頭に置いておかねばならないのは、過程の方なのである。」（Scott 1988, 訳書：74）

スコットは周縁化された女性の歴史としてではなく、歴史学本体の不確かさを、まさにジェンダーという視座をもって看破した。ロイはこうしたスコットの視点をポストコロナル都市論のなかにも忍び込ませていた。その政治学的主題として恒常的に未決定のカテゴリーとしての「都市的なもの the urban」を、ロイは見据えていたのだ。「政治的にそうであると決められたがゆえに都市だとされる」ような場所、それ自体の未決定性や偶発性、まさにプロセス自体を彼女の研究における最も重要なものに位置づけている。「植民地的想像力」「想像の地理学」を乗り越えていくために用意される道途において、ポストコロナル都市理論とジェンダー研究は、「告発」のみならず、むしろ「理論とい

う地図」を更新していく際にその効果を最大限に発揮するのではないだろうか。

ニール・ブレナーはロイの議論における「爆破してこじあける (blast open)」といった表現を高く評価している (Brenner 2018)。直ちに想起されるのは、上野千鶴子による以下のようなマニフェストである。

「ジェンダーは「学問的に中立的」な概念どころではない。むしろあらゆる学知のジェンダー超然性に挑戦する、破壊力と生産力をもった概念である。そして最後に付け加えておけば、今日あらゆる分野で、ジェンダーだけで対象を分析することはできないが、同時にジェンダー抜きで分析することもできなくなった。」(上野 2002, 岩波現代文庫版: 36)

このとき、間違いなくポストコロニアルという「冠」は、ジェンダーの裏面に付着している。

## 6. 関係論的都市研究の可能性について (林)

### 1) はじめに

『惑星都市理論』にて林が目指したのは、いわゆる「関係論的地理学」と呼ばれる潮流がどのような歴史的経緯のもと生じたものであったのか、この点を概観することであった。具体的には、ドリー・マッシーとナイジェル・スリフトのテキストを対象として、彼ら/彼女らの議論において「フレンチ・セオリー」がどのような役割を果たしているのか、そしてそのことによってどのような都市の記述が可能になっているのか、という点を論じた。

むしろ、本論は「関係論的地理学」の総体を描き出したものではなく、あくまでもその特徴の一つを掴みだしたものに過ぎない。また、論者間の同一性を論じた一方で、その差異性の把握は必ずしも十分ではない。しかし、いずれにせよ従来その理解が十分ではなかった「関係論的地理学」の知的系譜を描き出すという作業には、一定の意義があったと考える。事実、『惑星都市理論』読書会に参加した際も、評者の方から類似のコメントを頂いた。特に、近年の英語圏の文化研究において、地理学の知的影響が強く見られることから、文化研究に関心がある研究者から、英語圏の研究動向を探り当てるにあたって、本論は有用であるとの意見もあった。

一方で、特に地理学系の研究者の方から頂いた意見として、「このような作業に一体何の意味があるのか」というものもあった。林としては、上述した英語圏の諸研究において、地理学知の与えた影響を踏まえるのなら、その意義は十分にあるだろうと考えている。とはいえ、このような意見も一理ある。というのも拙稿は、実証的な都市研究において、このような議論がどのような意味を持つのかという点に十分に答えていないからである。

本稿の目的は、このような批判に応答する形で、『惑星都市理論』において林が行った作業が、実証的都市研究にも有用であるという点を述べたい。

### 2) 「関係論的 (relational)」とはなにか？

おそらく、上述したような批判の主意は、その議論が都市空間をめぐる具体的な問といかに結びつ

くのか、という点に帰結する。実際、マッシーやスリフトのいささか難渋なテキストからは、具体的な実証研究プログラムとの接続性を見出すことは困難である。しかし、彼ら/彼女らの議論が、拙稿でも指摘したように、それまでの地理学/都市研究において支配的であった認識枠組みの批判にあったということを踏まえるなら、この点は解消されると考えられる。

では、その批判の要点とはなにか。拙稿に記述したのは、彼ら・彼女らの議論が、特定の社会理論に基づき事例を整理することを拒絶し、それがいかにして成立したのかを問う作業を通じて、既存の社会理論に対しフィードバックをかけることを目指したものであるということであった。彼ら/彼女らにとって、それまでの批判的都市研究の問題関心や成果は批判されるべきものではない。だが具体的事象に関する分析は、社会理論に基づく特定の分析図式によって行われるべきものではなく、その事象と他の事象間の、あるいはあるアクターと他のアクター間の関係性を通じて推し量られるべきものである。

このような主張は、フーコーの系譜学の議論と连接的であり (Foucault 2004)、現前する社会/空間の系譜を、特定の知的資源 (が生み出したフレームワーク) に依拠しない形で説明しようとするアプローチである<sup>11</sup>。拙稿内で取り上げたスリフトとブレナーの論争も、この点より、なぜ生じたのかを説明することが可能であろう (林論文: 279-280)。つまりスリフトがなぜ、先回りする形で特定の分析図式を置くことを拒否したかという点、そのような前提は事例分析を通じた社会理論に対するフィードバックの可能性を失わせるものだからだ。

一方でこの議論は、それまでの都市研究における一種の分業体制に対する批判であり、それがこの分析枠組みをそのまま移入することを難しくさせている。つまりそれは、特定の社会理論に基づいて都市空間を分析することに対する批判であり、都市研究者は研究対象に即した社会理論 (研究対象の系譜学) の構築も行うべきだ、という主張だからである。また、この主張は当然のことながら、新たな分析図式の提供に直接つながるものではない。「関係論的地理学」に対する批判的意見 (実証研究との無関係性) が生じる理由は、こういう点に起因しているように思われる。

### 3) 「関係論的地理学」の独自性/非独自性

もちろん、このような主張が、「関係論的地理学」以前にまったくなかったわけではない。むしろ逆に、地理学や都市研究の最も素晴らしい成果の多くは、このような系譜学的な、あるいは関係論的な傾向を有しているだろう。だが重要なのは、「関係論的地理学」がこの論点を明示化したことによる効果である。

この点から明確に指摘できるのは、権力観の刷新である。特定の社会理論に基づきフィールドワークの成果を分析できないということは、フィールドワークの成果を特定の権力構造に依拠して説明することが出来ないということを意味する。社会理論が問題の抽象化の際に、特定の権力構図をしばしば用いてきたことを踏まえるのなら、この点は記述様式に対し大きな変更を加えるものとなる。ここで権力とは特定の主体から特定の主体へ行使されるもののみを表すものではなく、上述した「関係性」とほぼ同義となる<sup>12</sup>。つまり、権力とは社会諸主体が他の諸主体との間に持つ影響力を意味し、その複

雑な絡み合いの生成過程（経路依存性）と、その帰結こそが「関係的思考」においては問題となる。スリフトの、ドゥルーズ『フーコー』を引用して示した、「ダイアグラム」として資本主義を捉えるという記述は、このような微細権力の相互作用過程として事象を捉えるべきだという主張として見ることができる（林論文 p.296）。

この議論は私たちが対象を説明しようとする際のカテゴリー運用を巡る議論にも関わる。特定の社会理論に即して分析を行えないということは、私たちが分析を行う際に用いる概念運用の前提性を問題化する視座につながるからである。むしろ私たちが行うべきは、分析対象とする事象や、あるいはさらにその事象の認識を支える歴史的な脈を検討することで、特定の分析概念を用いる事に対し批判的かつ自覚的となることであろう。これは現在支配的に用いられている分析概念すべてを使用すべきではない、ということではない。そうではなく、特定の現象に対し特定の分析概念を当てはめられるように思える過程そのものが、検討されねばならないということである。

このような認識論の明示化は、批判的都市研究における成果を私たちがいかに解釈し直していくかという点に関わってくる。上述したように、都市研究における優れた先行研究は、「関係論的地理学」の論点と関連している一方で、その自覚が必ずしも十分ではない<sup>13</sup>。よって、この点から先行研究を解釈し直していくことには、古典のこれまで注目されてこなかった箇所に、新たな論点を見出すことが可能となる。

#### 4) 実証研究における「関係論的思考」の有用性

では、その「新たな論点」はいかに生成可能であろうか。この点について、本稿は「関係論的思考」を取ることの意義は、狭義の都市研究の枠にとどまらない研究を可能にするという点にあると考えている。この点については、具体的な体験談をもとに説明を行う。

林が今まで行ってきた研究の成果は、おおむね歴史研究・思想史の領域に属する。しかしこれはもともと想定したものではなかった。学部時代地理学のトレーニングを受けていたことから、林にとって研究とはフィールドワークを指すものであると当然のように考えており、事実修士課程一年目は、研究対象とした群馬県中央部のフィールドワークを行っていた。この段階ではインタビューなどを介した質的データと、統計データに依拠した地図作成をもとに、自らの研究仮説を証明することが可能であると疑っていなかった。

しかし、このような証明を行うためには、当然のことながら研究仮説が誰しもの目にもある程度確定したものである必要がある。しかしながら林の抱えていた「ロードサイドはいかに出来たのか？」という問いに対応する研究仮説は、一意に確定する類のものではなかった。「ロードサイド」という概念がどのような意味内容をはらむのかは、学術的に確定されたものではないからである。このようなとき、多くの都市研究は「ロードサイド」概念を様々な基準をもとに外在的に規定することで、議論を行う。たとえば、「ロードサイド」とは、「中心市街地ではない郊外部の商業集積地」というように。しかし、そのような定義を行うことで「ロードサイド」の多義性を捉え損なうのではないかと。そのような思われた結果、どうしてもそうした決断を下すことは出来なかった。

このような逡巡は、結局の所「ロードサイド」をめぐる議論やその分析対象が、特定のアカデミズムと対応する形で形成されたものではなく、よって社会理論との対応関係が悪いことによっている。「ロードサイド」を創り出すアクターは異種混交的であり、行政組織や大企業と言ったカテゴリーでもってその成立過程を捉えることは出来ない。また「ロードサイド」カテゴリーを作り出した人びとはアカデミズムに属していないことが多く、あまつさえ「ロードサイド」を創り出すアクターに常に影響を与えてさえする。このような事象と分析の間の密着性は、学術的知見の蓄積に基づく外在的定義の付与をためらわせるものであった。

そのため、林が取ったのはそれまでのデータを一旦放棄し、誰が「ロードサイド」を語り、作り出そうとしたのか、その歴史的経緯を整理することであった。つまり、「ロードサイド」の生成過程を林が説明するのではなく、今まで人びとがどのようにそれを説明しようとしてきたのかを論じようとしたのである。このような方針の転換は、当時はそれを明示的に意識していなかったが、特定の分析図式を前提せず、そうした図式がいかにして理解可能になったのかを追いかける、「関係的思考」に基づくものであったといえる。

よって、林はこの後、「ロードサイド」をめぐる言説空間の布置がいかに成立したのかを理解する作業を通じて、「ロードサイドはいかに出来たのか？」という問いに言説の面から答えることを目指すようになった。このような研究の推移は、一見林が、一般的な都市研究の領域から完全に離脱したように思えるかもしれない。しかし、林としてはこのような系譜学的な試みは、現況の都市空間がどのような論理によって構成されているのか、その点を理解する上でも不可欠であったと考えている。

というのも、こうした歴史的検討は、私たちの生きる都市空間が、どのような論理に基づき変容しているのかを問いかける作業と直結しているからだ。たとえば「ロードサイド」というカテゴリーを通じて私たちが空間を捉え、分析しようとするとき、当然のことながら「ロードサイド」という概念をめぐる歴史的積み重ねが、その視角に影響を与えている。よって、私たちが現代社会を、あるいは現代の都市空間を分析しようとするなら、自らが用いようとする分析視角、およびそれを支える諸カテゴリーが、歴史的にどのように形成してきたものなのかを問うことが必要となる。特に「ロードサイド」に代表される異種混交的な概念が、都市空間の表象過程において数多く生み出される、現代社会を分析する上ではなおのことだ (Latour 2005)。その意味において、フィールドワーク研究と史資料を用いたカテゴリー変容を問う研究は、相補的な関係性にある。

「関係論的思考」の有用性、あるいは「関係論的地理学」の可能性というのは、恐らくこのような点、つまり既知の社会的事実を、実証研究を通じて覆していく新たな方策を、歴史的なカテゴリー変遷という観点より示している点にある。それは確かに都市研究の新たな分析枠組みを直接的に保証してくれるものではない。だがそれは、新しい都市研究の可能性を導く一つの有用なきっかけを与えてくれるものなのである。

## 7. グレゴリーのルフェーヴル論\_補遺 (大城)

### 1) ルフェーヴルとラカンの間

グレゴリーは、*Geographical Imaginations* (1994) の後にもルフェーヴルの「空間の生産」論について、とりわけラカンとの関係を述べる続編を記している。「ラカンと地理学」なる論文がそれである(グレゴリー, 拙訳: 2011, 原著は1999年, しかしこれは改訂版というもので第一稿は1995年に刊行されている)。ルフェーヴルはラカンの影響を受けている。身体と空間の歴史について、ラカンの理論を援用しているはずだとグレゴリーは言う。『空間の生産』では4回しか引用していない(しかもほとんどは脚注)が、「こうした僅かな引用が示す以上により多くのものを、彼はラカンに負っている」と(拙訳 p.110, 以下の注記も同様に拙訳による)。「空間の生産に関する彼自身の主張の多くが、精神分析との批判的な対話を通じて進められてきた」のである (p.110)。

同じ1901年生まれルフェーヴルとラカンは、同時代人として、パリを中心として活性化された思想の潮流に影響を受けているはずである。両者ともとりわけ、ブルトンやアラゴンらによるシュルレアリスムやバタイユ、カイヨワ、コジェーヴらによるコレージュ・ド・ソシオロジと関わりをもったのであれば、フロイトとヘーゲル、マルクス(その前提としてのヘーゲル)には必然的に関心を向けないわけにはいかなかっただろう(もう一人、ここにニーチェを加えなければならない)。

「空間の精神分析にとって重要なことは、それが『ファリック(男根的な)垂直性』と水平的分割の空間的書き込みを分析するための立脚点を用意する」ことだと、ルフェーヴルは述べる (p.110)。この言い回しからはラカンの〈象徴界〉、すなわち「父の名」による「法的支配」、つまり社会的規範による〈想像界〉の管理を示しており、さらにはルフェーヴルの批判してやまない「抽象空間」の分析のツールとなることが示されているともいえる。彼の「空間の歴史学」においては、抽象空間は男性(男根)中心主義であり、だからこそ「(出来事が生じる)舞台と猥褻さをともに定義し、起こってはならぬことをその舞台と猥褻さに追いやる壁、囲い、ファサード」に関心を払ったのである。

またルフェーヴルは、「社会空間は、二重の禁忌(タブー)の語で説明されるようになる。一つは、子供(男子)を母親から切り離す禁忌——つまり近親相姦の禁止——であり、もう一つは、子供をその身体から切り離す禁忌——というのは、意識を形成する際に言語活動が身体の直接的な統一を断ち切るから——である。それは…(男の)子供が象徴的な去勢に悩み、自分自身のファルス外界の一部として客観化するからである」(Lefèbvre 1974, 訳書 pp.78-79, 一部改訳)とも述べるが、これは無論、「エディプス・コンプレックス」の話であり、子どもと母親との〈想像界〉的一体性を断ち、〈法〉のもとへと子どもを導く、そのプロセスを示すものである。「法」に従うためには去勢されねばならない。去勢とはファルスの欠如を受け入れることであり、ファルスの欠如しているものは母親である。母親は完璧ではなく、〈他者〉としての母親にはファルスが欠如している。このことを受け入れることがすなわち去勢である。「幼児は、父親のようにファルスを持ちたいという理想を抱くからこそ、父に同一化し、〈法〉を受け入れる」のである(片岡 2017: 137)。そして「法」は無論言語によっ

て成立する。〈象徴界〉と、それゆえにそれに監督される〈想像界〉はともに言語によって管理される世界となっている。

ルフェーヴルはこうした精神分析の用語を確かに駆使して『空間の生産』を書き綴っていくのであるが、通底しているのは、「視覚の優位」ならびに「空間に対する言語の優先・先行性」、すなわちラカンの言語中心主義への批判である。「社会空間の核心に、生産的活動ではなく、禁止を持ち込む」と彼は異議を唱える。ルフェーヴルの企図は、こうした優先・先行性を逆転させることにあるとグレゴリーは語る（1999, 拙訳 p.110）。故にルフェーヴルは「まず最初にトポスがあった。ロゴスがやってくるよりもずっと前に」。また「人は言葉だけでは生きていけない」と言う。彼のこだわる空間は「有機体的空間性」であり、それすなわち「身体の知性」を、彼は「抽象空間」に設置させようと目論むのである。「抽象空間」と「生物学的＝空間的現実」の関係性を問うという訳である。そして「社会のすべての構成員に、彼ら自身の身体イメージとその鏡像を示そうとする。これらのイメージと鏡像は、身体の肉体的から切り離されるものではないし、自然的世界の物理性とも切り離しえない。それらと完全に連続しているもの」と考え、「類推的でコスモロジー的な空間」と「抽象空間」とを切り離して考えることを、彼はしないのである。

またルフェーヴルは、空間は「読み取られる前に生産される」と宣言する。読解—解読—されるために区分化されたり方向付けされるものではないと。それはむしろ身体を持つ人々によって〈生きられる〉ためにあるのだとも。ルフェーヴルの「空間の歴史学」は、視覚の優位と言語の優位によって性質の低下したこの有機体的空間性の再構築を目的とするものである。そこに見られるのは、ヒューマニズムとロマン主義の結合であり、ラカンの構造主義とは正反対の方向を向いている。グレゴリーは「ルフェーヴルが失われた豊饒さへの哀歌を提示し、ところどころで「真正性」や主体性がある種の物質〔肉体〕的な擬態〔模造物〕を通じて回復できるという希望を抱いているように見える一方で、ラカンの〈現実〉はつねに既に表象＝再現や回復に抗している」という（p.111）。また「ルフェーヴルは有機体論的空間性の零落を「発達論的」かつ「歴史論的」に扱っているのに対し、ラカンの議論は「発達論的」なものの中だけで行われている。ルフェーヴルにとって、空間の政治と身体史および空間の歴史は不可分なものである。彼は脱身体〔肉体〕化の歴史的過程を通じた抽象空間の形成に特に注目している」（p.111）。これはラカンの解釈が構造主義にありがちな共時的な時間性においてのみ語られているということであろう。

さて、一連の精神分析的概念について、「厳密にラカンの意味でこれらの語を理解しようとすると」、ルフェーヴルによる「〈想像界〉と〈象徴界〉の間の省略は明らかに問題である」とグレゴリーは述べる（p.112）。だがそれこそが、まさにルフェーヴルの目論見であるとも彼は言う。「彼はこの二つを社会空間の中に、二重に刻印＝内接し、その接合の物質性を明らかにしようとする」からである。ルフェーヴルにとって〔筆者注：ラカンのいう鏡像段階における〕「鏡は、まず自然の生活によって、ついで社会生活によって生産される空間に、二重の空間領域を本格的に導入する。つまり、一つは起源と分離に関して想像的である空間であり、もう一つは共存と差異化に関して具体的で実践的な空間である」。こうした「二重性としての社会空間の生産は、意味深い帰結をもつ。というのもルフェーヴル

は身体の空間から空間の「なかの」身体」への転換が、「精神活動からの離脱」ないしは「暗化」を助長すると示唆するからである」とグレゴリーは続ける (p.112)。「暗化 scotomization」とは視野の空白部分を指すものであるが、のちに1920年代に精神分析に導入され、視覚的なものと言語的なものの特殊なもつれ合いによって生み出される精神疾患を診断する際に用いられるようになったという。

「ルフェーヴルは、空間はそもそもすべての感覚——味覚・嗅覚・触角・聴覚・視覚——を通して知られ、特徴づけられ、生産されるものであるし、こうした仕方すべてにおいて「身体の知性」と関連するものであるが、それが純粹に視野として構成されるようになってきた」という。彼はこのプロセスを鏡像効果の一般化と表象する。その中で社会空間がそれ自体、集合的な鏡となるような。

以下長くなるがグレゴリーの注釈を引用しておく。「しかしながらラカンとは異なり、ルフェーヴルにとっての鏡の重要性は、その反射が「主体〈として〉私の統一性を構成する」というより、むしろそれが「私であるもの〈記号=兆候 sign〉へと私であるものを変換する」ということにある。「この過程が行き着くところ、空間はもはや強度の視覚化、攻撃的で抑圧的な視覚化という社会的存在を持つだけとなる。それゆえ、それは純粹に視覚的な空間である。それは象徴的な意味においてではなく、事実においてそうなのである。視覚の領域が優位を占めることによって、一連の代替と転移が生み出され、これらの代替と転移によって、視覚的なものが全体的な身体の地位を押しつけ、その代わりに務めるようになる」。これらの言明は極めて重要である。脱肉体化へとつながるからである (p.112)。「視覚の優位」のプロセスがこれなのである。

この視覚の優位、言い換えると「眼球中心主義」と「ロゴス中心主義」の徹底、後者はスペクタクル化とテキスト化を両輪とするわけだが、さらにこれらについてルフェーヴルは「言葉と記号は物理的身体を自我の外へと追放する。魔術性と合理性が解き難く絡み合ったこの活動によって、(言葉による)肉体の引き離し disembodiment と(経験による)再度の肉体化との間の奇妙な相互作用が、根無し化 uprooting と再定着化 reimplantation との間の奇妙な相互作用が、抽象的な方向での空間形成と特定の広がりにおけるローカル化 localization との間の奇妙な相互作用が始まる」と述べる。「これこそ、はじめのうちは生命の初期段階における混合空間——なお自然的ではあるが、すでに生産された空間——であり、のちに死と芸術の混合空間、要するに表象の空間になるのである」とも。「透明性と読みやすさという視覚空間」は「知と権力との交換、空間と権力をめぐる言説の交換、が増殖しかつ統制される」空間であるとルフェーヴルは続ける (p.114)。

そして「隠喩的に言うと、この空間は力を、男性の豊饒さを、男性の暴力を、象徴化する。ここでもやはり、部分が全体と取り違えられる。ファルスの残忍性は抽象的なままではない。というのも、それは警察・軍隊・官僚制度といった政治権力の残忍性、強制手段の残忍性を有するからである。〈ファリックなもの〉の勃起性は、垂直性をとりわけ重視する。〈ファリックなもの〉は、男性による女性支配が向かうべき空間へと向かい、それがこのような空間的实践を生み出す過程(隠喩と換喩の二重の過程)の目標であると宣言する」と糾弾するのである。これはまさに「抽象空間」が「身体の知性」に溢れた有機体的空間に働いた暴虐の糾弾に他ならない。



## 2) 都市と身体性のあり方に見られる変化：資本主義と「欲動」

グレゴリーによるラカンとルフェーヴルの対比的理解では、実のところ〈現実界〉に触れてはいない。〈想像界〉と〈象徴界〉のせめぎあいの段階で終わっているのである。ラカンは前期（1950年代）・中期（60年代）・後期（70年代）とその理論を変転させていくが、グレゴリーの議論は、その前期の段階にとどまっている議論である。中期になると〈現実界〉が〈想像界〉と〈象徴界〉の組み合わせに対峙的に措定されるようになる（片岡 2017: 150）。〈想像界〉と〈象徴界〉において主要概念であった「欲望 *désir*」（シニフィアンの的に構造化されており、象徴界の〈法〉に従うもの）に変わり、〈現実界〉では「欲動 *pulsion*」が前景化する。「欲動」は「むしろ言語の〈法〉をはみ出すような過剰なもの」である。そしてそれは「人間をその満足へ向かって駆り立てるような根源的な力」である。しかも「欲動」は言語よりも根源的であり、人がシニフィアンの主体になる前から作動しているという。欲動は〈法〉の抑制の動きを振り切って、その満足を得るために稼働する。「享楽」を得るためである。こうなると、我々が日々目にしている、金融工学的なものの上にその先にまで突き進む資本主義の動きが、まさにこうした事態と相同的なものであることが分かるだろう。

資本主義はますますその駆動力を上で言う「欲動」に頼るようになってきているように思える。SNSの発達によって、従来潜在的なものに過ぎなかった承認欲求が顕在化するようになった。インスタ映えする景色・衣服・食べ物等々にありつく私、何か世で起こっている事態にコメントする私、等々…。AIの発達やSNSの介在に大きく依存している我々の日常的実践、敢えてここでルフェーヴルに寄せて言えば「空間的实践」は、無論、都市計画やモニタリングによる「空間の表象」の変化と連動している。JR東日本のプラットフォームにある黒い飲料自動販売機は、搭載カメラによって購買しようとする者の顔相を捉え、独自のアルゴリズムによって購買候補者の希望飲料を提示するという。これは警察権力による個々人の身体所作の分節化による同定と繋がっている。衛星搭載のカメラはもはやほぼ我々個体を分節化できるぐらいに高精細化している。

外形的にはすべてが捉えられているなかで、知識レベルでもほぼwebからの検索情報に依拠しているとなれば、確かにここにあるはずの肉体的身体はその存在根拠をどこに求めるべきであろうか？ 万事「外部」によって把捉され、必要な情報をその「外部」に依拠している状況なのである。しかも寄る辺となるべき情報が、安易な「まとめサイト」の参照行為によって、本来広がっているはずの情報の海から、自己都合のオンデマンドによる短絡された情報の（かなりイデオロギーのバイアスを帯びた）レジュメしか参照しない事態が日常化しているのである。テクノロジーの発展、利便性＝簡易化＝安直化の優先化によって、「その他もろもろ」というマージンの領野は視界から消え、テキストのコンテクストすら顧みられない「内旋 *involution*」状況にあるのが今日の知的状況となっている。

ちなみに振り返ってみれば、19世紀後半から両大戦間期にかけて、我々は常識的（あるいは日常）世界の「外部」に対する関心を急速に深めていった。物理的な「外部」は、重・労働力等を求めて列強の植民地を超えて両極地方にまで及んだし、精神的「外部」としての精神への関心もフロイトの精神分析のみならず、物理的「外部」としての植民地における民族学／人類学的研究による「未開人」

の精神構造の解釈にまで及んだ。シュルレアリスム運動もこれらと連動していることは言うまでもない。だが、それから100年経った現代、この「外部への関心」は後景化してしまった。「外部」の希薄化が進んだといえよう。

だが表層的にそうであっても、事実的には「外部」の搾取はつねに進行している。従来のスケールを超えた後背地の搾取にまで及ぶ「惑星都市化」は、外部への拡張という点では100年前と変わりない。しかも今では金さえ払えば宇宙空間に民間人が出かけられるようになったのだ。精神面ではどうだろうか？ AIの発達と人間自身の身体的「脳」の外部化が顕著であるといえよう。VRの発達によりますます「視覚の優位」が進んでいる。ゴーグルをしてゲームをする人々の様は、筆者には不気味なものとし映らない。

こうした事態を鑑みれば、惑星都市をめぐる概念との関係で言えば、グレゴリーのルフューヴル論を踏まえつつ、我々は、とりわけ〈現実界〉との関係性について考えねばならなくなるだろう。「言語化できないもの」「表象しえないもの」をどう考えればよいのか？ そのための補助線を敢えて引くと、たとえば放射能との関わり方がそのヒントになるやもしれない。放射能というオーダーの違い過ぎる対象を、操作可能なものと楽観していることの愚かさは、2011年3月の東日本大震災による福島第一原発の被災状況を見れば明らかである。中沢新一（2011）は、原子力技術は過去のエネルギー技術とはまったく隔絶した技術であるという。火の利用から石油に至る過去のエネルギー革命は「生態圏から直接的に採取可能な燃料を使って」いたが、原子力だけは生態圏に属さない「外部」から持ち込んだエネルギーであると。本来取り扱うことが不可能な存在にまで手を出し、一時的に制御可能と思いついたのはいいが、やはり同様に人間のオーダーを超えた地震や津波によって、その浅はかな自信は木っ端みじんに吹き飛んでしまい、惨憺たる災禍しか残さなかった。これはまさに、〈現実界〉の発現への対処不能性が露呈した事態であったといえるだろう。人間の制御能力とは全く異なるオーダーの前に、ただただそれまでの傲岸さを恥じねばなるまい。

AIの発達も裏を返せば、代替労働力の開発・生産に外ならず、それらの普及に伴う失業率の増加は必至であろう。VRにしても、何かオルタナティブな世界に安易にアクセスでき、そこに居さえすれば、タンジブル（触知可能）な現世とは別の、自己都合がまかり通るオンディマンドな世界で己のアイデンティティを担保し続けることができるのであろうが、タンジブルな世界は残念ながらつねについて回る。それを払拭することは無論できない。

ラカンやルフューヴルならこの状況をどう解釈するであろうか？ ジェイムソン（1983）がもう半世紀前に述べたような「現象学的現在」を我々は生きているということなのだろうか？ そこには未来も過去も無い。永遠の現在だけが在る。「今・ここ」以外の時間性はなく、無論「他者」など存在すべくもない。自己都合を優先し、オンディマンドな世界観がデフォルトとなってしまった状況を鑑みれば、そう考えるのもあながち間違いとは言えないかも知れない。

## 8. プラネタリー・アーバニゼーションにおいて都市への権利を再考する (平田)

### 1) 何を問うたのか。

「都市への権利、ある思想の運命」と題された論考は、初発の問題関心においては、対象でもあると同時に概念でもある「プラネタリー・アーバニゼーション状況」において――すなわち都市化の波が都市の領域のみならず国家の境界をも超えて地球全体を飲み込むように広がる状況において――、都市というローカルな場へのアクセスを要求する「都市への権利」がいかなる意味を持ちうるのかを考察することになった。

この問いかけは、プラネタリー・アーバニゼーション研究と都市への権利に関わる点において渡邊論文と重なる部分がある。本書『惑星都市理論』の理論的枠組みを提出するブレナーの議論を検討した渡邊論文では、自覚的であれ、無自覚的であれ、これまで――方法論的个人主義をパラフレーズした――「都市中心主義」を採用してきた都市研究の領域において、都市のスケールを超えてヒンターランドにもたらされてきた都市化の影響が考察対象とされてこなかったことを学説史のなかで確認した上で、都市への権利もまた「都市中心主義」という桎梏から解放されるべきものであることを提案しているからだ。

この共通性を喚起するために、本書352頁において、プラネタリー・アーバニゼーションと都市への権利を再び結びつけることに懐疑的な見解を示すメリフィールドや都市部から農村部への人口移動が増加しているフランスの文脈を踏まえて、「田舎への権利」を主唱する都市研究者エリック・シャルムとともに、渡邊論文を参照している。

しかし、「都市への権利、ある思想の運命」では、プラネタリー・アーバニゼーション研究と都市への権利との関係に関する問いかけをさらに分割する。つまり、「都市への権利」を検討するにあたって、強調点は、「都市」に置くべきなのだろうか。それとも「への権利」のほうに置かれるべきだろうか。この分割は、どちらが本質的に優位であるかを示すのではなく、あくまで都市への権利の考察を先に進めるためのものである。先に触れたように、この考察において、これまでは前者の問いかけに属するものが支配的であった。結果として、この問いかけは、都市のステータスをめぐる歴史や、都市／非都市に関する理論的な定義に関する探究へと人を差し向けるが、しばしばルフェーヴルの時代の都市と現代の都市とでは状況が違うことを確認することで終わる。他方で、先行研究において、後者の問いかけ、つまり権利に着目する文献がないわけではない。それゆえ本稿の第一節は、この問いを考える上でおそらく最重要文献であるカファイ・アトーの論文「都市への権利はいかなる種類の権利なのか」(強調原著)についての考察から始まる(Attoh 2011)。

平田論文の最大のチャレンジは、ルフェーヴルが提起した都市への権利の概念を媒介として、都市論・空間論と権利論を結びつけることにある。その過程において、都市への権利と人権や民主主義とのつながりを明らかにするために、クロード・ルフォールやエティエンヌ・バリバルの政治哲学を援用した。学問領域の「横断」や「侵犯」といったキャッチフレーズは、聞こえはいいが、裏返しに

言えば単なる「越権行為」に陥る可能性があり、また不十分なものであれば、意図や意味の不明瞭なものになる。それを回避すべく、アトーの論文のみならず、そこで参照されている文献をフォローしたつもりだが、それが十分な理解・説明になり得ているかは、読者諸氏の判断を待ちたい。

マサオ・ミヨシ(2007)は、領域横断性の条件は、「真剣に怒られること」を覚悟することだと述べていたが、この論考、あるいは本書もまたそうした真剣な議論を通じて筆者ないしは別の著者が新たな議論を生み出せるようなオープンなものであることを願う。

## 2) 何を明らかにしたのか。

以下では、「都市への権利」の権利に着目し、そこに含まれる新たな意味を明らかにするために、アトーが提出した論点とそれに対する筆者の観点を示す。

アトーは、権利の概念を(言論の自由、信教の自由、投票権などの)自由権、(労働権(公正な賃金を受け取る権利)、教育権、居住権、健康権などの)社会権、(民族的マイノリティの自己決定権、平和、環境、文化の保全などの)文化権に大別した上で、都市への権利の権利が自由権に属するものなのか、社会権に属するものなのかを問う。前者に属するものとしてこの権利の使用を肯定する論者として、アトーはドン・ミッチェルの立場を挙げる。彼は、1990年代のジュリアーニ市政化のニューヨークを筆頭にホームレスを排除するような治安政策に対抗して都市への権利に訴えるからである。他方で、社会権に属する都市への権利を主唱する論者としてデヴィッド・ハーヴェイを挙げる。ハーヴェイは、サブプライム危機、すなわち住宅と金融が大規模に結びつくことで引き起こされた2007年から2008年にかけてのグローバルな金融危機に際して、そうしたサブプライム・ローンを利用して住宅を利用した低所得者層が真っ先に住居を奪われる事態に対して、「個人の権利というよりも集団的な権利」として都市への権利を定式化していたからである。都市への権利は、自由権、すなわち個人や少数派の権利として存在するのか、それとも社会権、すなわち集団や多数派の権利として存在するのか。アトーの問いかけは、都市への権利が有する許容力や開放性を腐すものでは断じてない。この言葉がマジック・ワードやバズ・ワードではなく、真摯に法学において吟味されるときには避けて通ることのできない問いかけがあることを説得的に論じるのである。

他方で、このアトーの議論に対して、二点ほど疑問が投げかけられよう。

第一に、こうした権利の解釈は、アトーの参照によって示されるように、権利を個人のものとして前提する自由主義的な枠組みにあること。第二に、権利の解釈は、権利の分類学、つまり特定の権利への単なる参照に留まらない政治的争点の産出と、それを通じた新たな権利や社会関係の創出を含むものではないのかということ。こうした問いかけは、個人の価値が重要ではないことを意味せず、むしろその価値が社会関係や社会構造との関わりで積極的に肯定されるような分析の道筋を切り開くことにある。

実際、筆者が引用したように、ルフェーヴルにおいて都市への権利は、民主主義に、そして、古代ギリシャの民主主義と近代民主主義とを分かちつという意味で、その根幹をなす人権に結びつけられている。「私が(中略)「都市への権利」について語っているのは、まさしく郊外の住民やその隔離や孤立状

態のことを考えていたからなのです。言葉の法学的な意味での権利が問題なのではありません。民主主義の生みの親であるひとつの権利が問題なのです。「人権宣言」の諸権利は決して完全には達成されえません。けれども、社会状況を決定するためにはいつでもそこに戻る必要があるのです」(Lefebvre 1972, 2000年版: 144-145, 訳書: 157)。

クロード・ルフォールは、自らの政治哲学の争点を次のように述べる。「何よりも、私に重要だと思われたのは、人権を個人の権利に切り縮めると同時に民主主義を国家と個人という二つの項によって維持される関係のみに帰着させる、一般に広まった解釈と闘うことだった」(Lefort 1986: 45)。

ルフォールについて語るなかで、エティエンヌ・バリバルはこう主張する。「人権の政治は、人権を引き合いに出す政治ではなくて、人権の領域を拡大し強固なものにし、新たな権利を発明することを可能にするのです」(Balibar, Monod et Revault d'Allonnes 2019: 97, 89)。

より詳細な議論に関しては筆者の論考を参照するにしくはないだろうが、上記三者の引用において、少なくとも次のことは確認できよう。人権への参照は単に既存の法学的権利を参照することだけを意味するのではない。それは、個人の権利を超えて、民主主義の発明に、すなわち新たな権利の創出とそれを通じた新たな社会関係を築き上げることに向けられているのである。

このような理路において都市への権利を考えること、それは本稿の1において荒又が好意的に筆者の論考(平田論文)を参照し定式化するように、都市への権利を「生成」しつづけるものとして想定することであり、そのような生成とパラレルに生じる社会関係と空間関係の生成にも考えを巡らせることである。

### 3) 何を考えることができるのか。

これまで見てきたように、都市への権利が、単に実体としての制度を参照するにとどまらず、政治的な葛藤を示すかたちで公的領域を浮かび上がらせるものであるとするならば、さらには、それが単なる既得権であるよりも新たな権利の発明を促進するものとして考えられるのであるとするならば、このような権利の観点から改めて都市への権利の「都市」について考えることができよう。

この点で本書の荒又論文におけるパリのリスケーリングと排除の問題は、排除される者たちから要請されるオルタナティブな都市生活というものの分析を要求する。その分析は、パリという都市を貫くプラネタリー・アーバニゼーションの諸相をも示すものである。荒又論文において参照されるテリーザ・エンライトは、現代のグラン・パリ形成に関する研究のなかで、「世界各地の都市では、似たようなデザイン、土地利用計画、行政的な取り決めで用いた、巨大なスケールに拡大した都市計画が採用されている」と述べる(Enright 2016: 222)。つまり、巨大化する都市計画は、パリに限定されない世界的なトレンドとなっているのである。

このような巨大化するスケールの都市計画がグローバルなトレンドになっていることと、ブレナーが指摘した「まだら状の地理」、すなわち空間に残された不均等発展の爪痕とは矛盾するものではないことを荒又論文は、パリ市域と周辺地域の拡大と高密度化を分析するなかで示している。

さらにプラネタリー・アーバニゼーションの物質的基礎としてのインフラストラクチャーとそれを

差配するロジスティクスに焦点を定めた北川論文や原口論文では、インフラストラクチャー／ロジスティクスによって産み出されたまだら状の地理——および原口論文の言葉を借りれば「分散化された立地」——とそれへの対抗空間の創出を分析の俎上に載せている。原口は論文の末尾においてこの対抗空間の創出を「都市への権利」の再構築という課題と響き合うものとしている。この論点は、ブレナーの批判理論的都市理論と関連するものなので、平田（2022）の議論を手短に参照する。

ブレナーは、プラネタリー・アーバニゼーション研究と並行して批判理論的都市理論を展開する。「批判的都市理論は、単なる社会病理学的な観点から提出される処方箋ではなく、社会あるいは都市に潜みながらも、抑圧されている諸力の解放（emancipation）およびその可能性に関心を抱く。そのような可能性の領域を、ルフェーヴルは「都市への権利」と名指し、ブレナーは「アルター・アーバニゼーション」と呼ぶ。1999年、シアトルの反WTO〔世界貿易機関〕運動において、アルター・グローバルイゼーションを唱える組織から「別の世界は可能だ」という標語が掲げられた。その反響は、オキュパイ・ウォールストリート運動にこぼれ、「別の都市は可能だ」というモットーを生み出すことになる。さらにこうした流れを受けて、ブレナーは「別の都市化は可能である」というこだまを返すのである」平田（2022：75）。

対抗空間の創出は、プラネタリー・アーバニゼーションを堰き止め、脱臼させ、その方向づけを変化させるようなアルター・アーバニゼーションの形態として考えることもできよう。そして、このような別の都市化を要請する運動を構築していくにあたって、本節で概観した権利に関する考察が寄与できる部分は少なくないはずである。

## 9. プラネタリー・アーバニゼーションに基づいて離島地域を研究するために（馬渡）

### 1) 事例研究と理論研究の進展を目指して

『惑星都市理論』において、筆者は「自然の生産」論を扱った（以下「馬渡論文」とする）。都市政治生態学を背景とした近年の「自然の生産」論のなかでも、筆者の関心は特に自然の商品化に向けられていた。N・スミス『不均等発展』（Smith 1984）を読み直しながら、自然の生産と空間の生産が彼の理論のなかで密接に結びついていること、資本主義社会において土地や空間の生産力化が進行してきたこと、近年では自然の生産と空間の生産が人間の身体および大気圏まで射程を伸ばしていることについて論じた。自然の生産論は、自然をめぐる表象の観点からも検討する必要がある（浅野・中島 2013: 18-9）、また馬渡論文では実際その検討が手薄になったのだが、本稿でも当座、筆者の関心（「自然の商品化」等）に基づいて論を進めることとしたい。なお、随時『惑星都市理論』やその前後で発表された研究の関連する論点——ヒンターランド、オペレーショナル・ランドスケープ、採取－採掘——にも触れる。

次節では、筆者が研究対象としている香川県豊島・直島の事例について、改めてプラネタリー・アーバニゼーションの視角からいかに対象を把握し認識することができるのか、素描する。

さらに、豊島・直島の事例のなかでも、直島の銅製錬の事例を踏まえたとき、惑星規模の採掘やロ

ジスティクスをめぐる鉱山や製錬のネットワークをいかに理論的に、そして実証的に把握することができるのか。この関心にに基づき、次々節では、アルボレダ『惑星鉱山』を紹介する。

## 2) ヒンターランドとしての離島 ― 廃棄物不法投棄, 砂利採掘, 銅製錬, 国際芸術祭

豊島は香川県と岡山県の間にある離島である。本書渡邊論文の議論に基づくならば、離島は都市の「ヒンターランド」とみなすことができるだろう。渡邊は、ブレナーとカツィキスの論稿を引きながら「都市は、労働力、材料、燃料、水、食料といった様々な代謝的投入物に下支えされるとともに、廃棄物、汚染、炭素のように多種多様な代謝的排出物を非都市の空間に産出している」(本書渡邊論文: 89) とまとめる。豊島は、都市の構成的外部である非都市空間としての離島としてみなすことができる。そして、そのような離島である豊島に、特に1980年代以降、産業廃棄物が押し寄せることとなった。豊島の産業廃棄物には自動車のシュレッダーダストが多く、都市部からの廃棄物を処理する静脈産業のロジスティクスの終点に、豊島が位置していたと言えよう<sup>14</sup>。

豊島での産廃不法投棄事件は確かに1990年代、大きく人々の耳目を集めることとなった。他方、事件の前史として、豊島では「土地の商品化」が進行していたことには触れておきたい。詳細について筆者が参照できる史料は無いため、概要を記すだけとなるが、元々(業者Mの)祖父が持っていた土地の良質な砂利に後の廃棄物処理業者となるMが目をつけ、1963年に無断採取が始まったことが事件の前史の一つである。砂利を採取しきった後、Mは「山をつぶして砂利を採取した後の平地を利用して廃棄物の処分地を造れば一石二鳥でいい金もうけになる」という認識を持ち、実際にMは処分地の造成に向けて行動する(以上、杉本 2021: 261-9)<sup>15</sup>。

土地が商品化することについて、もう少し瀬戸内海地域の特徴に引きつけて考えることもできるだろう。不法採取ではないが、香川県小豆島および豊島、そして香川県丸亀市や岡山県笠岡市周辺に連なる諸島(塩飽諸島、笠岡諸島)は、約400年にも及ぶ石材の生産地としても知られている。石材は、古くは大阪城の石垣に使用され(1620年)、明治・大正期には日本銀行本店本館(1896年)や東京駅丸ノ内本屋(1914年)に使用された<sup>16</sup>。石材の切り出しや運搬の労働、そしてロジスティクスがどのように展開したのか、この点は別稿を期するほかないが、「土地の商品化」や土地を切り売りすることに伴う労働と流通は、近代以降始まったことでなく、合法・非合法問わず歴史的事象なのである。

また同地域は、オペレーショナル・ランドスケープの観点からも考察の対象とすることができる。資本の不均質なオペレーションによって形成される「採取の景観」(Mezzadra and Neilson, 2017)は、典型的には豊島の産廃中間処理場(既に解体済)の様相、直島の三菱マテリアル銅製錬所が約1世紀に渡ってもたらしてきた周辺の「はげ山」の景観によって惹起されるだろう。それだけでなく、直島の銅製錬そのものは「惑星鉱山」のネットワークに位置すると考えられる。この点については次節で触れたい。

最後に、補足として瀬戸内国際芸術祭について取り上げる。豊島や直島は2010年以降、3年に1回開催される瀬戸内国際芸術祭の会場となっている。ディレクターである北川フラムの構想が鶴見俊輔の限界芸術論に基づいていること(北川 2015)<sup>17</sup>、福武總一郎の「直島メソッド」がアートによって少

子高齢化著しい地域を活性化しようと試みていること（福武・北川 2016）。これらの理念は一見否定することが難しいように思える。しかし実態はどうか。実態について「アートによる地域の搾取」（逆もまた然り）という論点を提起することもできる（たとえば、徳田 2019）<sup>18</sup>。筆者はアートプロジェクトや国際芸術祭によって地域を周遊する人々から何かが広く「採取」されているという予感を持つ。端的には、地域内外の労働力やボランティアな活動が「芸術」の名のもとに集約・動員されている。それは鶴見俊輔や北川フラムの限界芸術的理念とは裏腹に、結果的に（限界）芸術に向かう人々が（限界）芸術からさえも「疎外」されているという逆説を示すのかもしれない<sup>19</sup>。

ここまで簡単ではあるが、瀬戸内海の離島地域（特に豊島、直島）をプラネタリー・アーバニゼーションの視角から捉えるための素描を行った。

### 3) 惑星鉱山論から直島を照射する

前節では、基本的に国内の事例（豊島・直島）に基づいた議論を行った。豊島にしる直島にしる、それら土地での「自然の商品化」「採取・採掘」「オペレーショナル・ランドスケープ」がどのように惑星規模に連関しているのか。プラネタリー・アーバニゼーションの視座を借り受けて事例を見るだけでなく、実態としてどのような関係が結ばれているのか、検討する必要がある。むろんこの小論では具体的な豊島、直島、他の離島が惑星規模で果たす役割を論じることができない。またそのような議論を展開するためには、理論的彫琢も必要となろう。そこで、本稿はさしあたりアルボレダ『惑星鉱山』（Arboleda 2020）第1章を主に紹介し参照先としながら、直島の銅製錬を惑星規模の「採掘の地理学」に位置づけるための試論を述べる。

なぜ同書を取り上げるのか。直島・三菱マテリアルでの銅製錬では、現在でも原料となる銅精鉱をチリ等から輸入している。三菱直島が惑星規模の銅ロジスティクスの当事者であることを我々は認識する必要がある。この目的と関心に基づくなら、アルボレダの同書は格好の素材となる。

「惑星鉱山」とは何か、まずは基本的な論点を整理する。著者曰く、採掘と製造の空間的分離が進行したことで、鉱業は港湾、海運業との機能的統合を強めることとなり、現在は採掘・加工・精錬、そして輸送を含む、統合されたロジスティクス・システムとして理解されている。

著者曰く、「惑星鉱山」とは、「採掘の地理学」である。同書は上記の鉱業の変容を念頭に、「惑星鉱山」を2つの世界史の変容の産物として捉える。その変容は第一に、西洋に限定されない、後期産業化（late industrialization）の新しい地理の動向である。第二に、著者のタームである「第四機械時代」の到来、すなわち、労働プロセスのロボット化、コンピュータ化の進行である。

同書では、「採掘の地理学」が、「中心と周縁」といった世界システム論の前提を超えて、いかにグローバルな生産と交換の装置に絡み取られているかが示される。すなわち、筆者は鉱山を「領域インフラストラクチャーと空間テクノロジーによって密集したネットワーク」として捉えている。

そもそも、採掘が領域性を超えて、地球の地理全体を横断する資本の循環システムの中に融合しているという「惑星鉱山」の考えは、M. ラバンのDeterritorializing Extraction（Labban 2014）のアイデアに依る。ラバン曰く、現代の鉱業のテクノロジー的基盤は、製造と採掘、廃棄物と資源、生物学



(的専門知識)に基づく産業と非生物学に基づく産業の境界を曖昧にしている。著者はラバンの発想を踏まえたうえで、「採掘の空間」を、ロジスティカルなインフラストラクチャー、海を越える「回廊」、金融ネットワーク、労働の地理学を含むものとして考察しようとする。さらに、グローバルな規模での鉱業の再編は、国家権力と資本主義的帝国主義の新たな様相、さらには新たな採掘の領土性を生み出す。

ここで著者は方法論的ナショナリズムの限界を提起する。曰く、方法論的ナショナリズムは、グローバルなサプライチェーンとスプロールする都市システムが、鉱山の「社会代謝的」生産・再生産にいかにか深く絡み合っているかを曖昧にする点で分析面の限界を有するのである。

方法論的ナショナリズムを批判するうえで、著者はブレナーのウォーラーステイン批判に依拠する(Brenner 2004)。ウォーラーステインのアプローチは、国民国家の歴史的軌道とダイナミクスに焦点を当てており、多国籍企業、インフラストラクチャーの巨大開発、資本の循環は副次的なものにとどまっている(2章)。

さて、このような理論的・方法的背景のもと、同書は、採掘空間の労働者や地域コミュニティの生活を、一次産品生産の世界の「外部」と考えられてきた人々(移民、テクノクラート、金融業、港湾や倉庫、工場で働く労働者など)と結びつけ、その関係のネットワークを明らかにすることを狙いとする。すなわち、地理的不均等発展は、国際的政治関係だけでなく、資本主義社会の「空間の生産」に内在する、という主張をアルボレダは提起する。

さらに同書は、帝国主義を、グローバルな価値関係が顕現する現象形態として理解することを提起する。資本主義的帝国主義は、国民国家の政治的關係によって規定されるのではない。帝国主義は、システム全体の水準で、資本の有機的構成を高めようとする方向性によって、規定される。

それでは、このようなアルボレダの惑星鉱山論から直島の事例をどのように照射できるだろうか。いくつかの方向性を示し稿を閉じることにしたい。

アルボレダの議論に基づくなら、統合されたロジスティクス・システムの一部として、直島を把握する方向性がありうる。また、世界システム論(中心と周縁)の前提を超えて、中国の経済的成長を踏まえながら、直島の果たす役割を見定める必要がある。「採掘の空間」は、チリの一部の鉱山地域に閉じているのではない。製錬の場である直島も含めたうえで、その空間が成立しているという認識を持つ必要がある。

補足として、今回は詳述できなかったが、特にラバンの惑星鉱山論においては、電子廃棄物によって構成される「都市鉱山」からのレアメタル採取を批判する目論見があり、鉱山からの採掘が「脱領土化」している状況が描かれる(Labban 2014)。直島の三菱マテリアルは、都市鉱山からの金属採掘の拠点としても知られており、惑星全体が都市化し、都市が「鉱山化」する中で、同島がどのような役割を持って「惑星鉱山」に組み込まれているのか、さらに検討する必要があるだろう。

最後となったが、離島地域の事例研究は、プラネタリー・アーバニゼーションという議論のアリーナが切り開かれたことによって、現代的意義をますます帯びることとなった。今後、事例研究を深めたその先にどのような新たな理論形成が可能となるのか。引き続き考えていきたい。

## 10. おわりに

以上、2021年4月に刊行した『惑星都市理論』の論考すべての展開可能性について述べてきた。執筆者それぞれの問題関心に引き付けた議論であり、大きな広がりを持っているが、それでも今後の都市研究のために必要とする視角は、以下の三点に整理できるように思われる。

一つは、オペレーショナル・ランドスケープとの関連である。原口・平田編（2018）の解題で触れているように、N.プレナーによるプラネタリー・アーバニゼーション論には初期からカナダのオイルサンドのイメージがあった。その採掘による環境負荷の問題は、「人間中心主義」あるいは「都市中心主義」の最たるものである。本稿で見えてきたように、それはレアメタルを含めた採掘－採取の空間、その後放棄され、放置された空間、そして砂利の採掘場であり産廃投棄地であったところからアート化される空間へと広がりを見せている。それは都市が関係論的に捉えられるものであることを極めて明瞭に示す視角でもある。

二つ目は、ロジスティクスとの関連である。資本が必要とするときに必要な量の物資を運ぶことは、資本主義の初期からその発達に合わせて展開しており、留まることを知らない。本稿で見えてきたように、化石燃料自体が動かせない水力などからの可動力につながる手掛かりとなったのであり、原子力はその極にある。港は、労働者の抵抗にあう難所であったが、コンテナ化によって「解決」され、パリでは大都市のあらたなロジスティクス空間を展開させるものとして港への接続が見直されている。ドローン、AI、VRなどの先端技術は、身体を外部化し、さらなる加速化に介入しようとしている。「都市への権利」の議論が、ますます必要とされている。

三つ目は、フェミニズム理論の重要性である。都市研究において、ジェンダーの視点は重視されてこなかったが、もはやその重要性は明らかである。また本稿で複数の執筆者によって指摘されたように、それは既存の学問を超える「破壊力」を持つのであり、フェミニズムを通じた視野の拡大は不可避である。

それぞれの著者が示した論点は、もちろん、上記にとどまらない。本書および本稿が、より広い議論を呼び起こし、都市研究の今後を作り出す一端となることを願っている。

### 注

- 1 「ポスト・アーバニズム理論の構築——21世紀の複合的都市研究のために」研究代表者：平田周。
- 2 本書のあとがきにおける仙波による表現（「それでも惑星都市を彷徨するために」）を援用した。
- 3 本稿の締め切りは2022年9月30日であった。
- 4 内容は以文社ホームページにて公開されている。  
<http://www.ibunsha.co.jp/contents/planetaryurbanization01/>  
<http://www.ibunsha.co.jp/contents/planetaryurbanization02/>  
<http://www.ibunsha.co.jp/contents/planetaryurbanization03/>
- 5 以下の問題については、この組織のフェイスブックページで詳細に呼びかけられている。  
<https://www.facebook.com/VigilanceJO93>

- 6 しかし、コロナ禍の2020年8月、結局は強制的な立ち退きによって住む場所を失った人々がいたことが報告されている (Kontos 2022)。
- 7 このような施設の建設がオリンピック招致計画に入っていないことは重大な問題である。オリンピックの競技施設が既存のものであったにせよ、関連施設によって見えづらい形で開発が進められることがこの例から読み取れる。
- 8 2022年3月現在、2024年までに開通予定なのは、現在のパリの地下鉄14号線を南北に延長し、パリと選手村のプレイエル駅、オルリー空港を結ぶ路線のみに縮小している。
- 9 当時の展示の図録として、*Le Grand Pari(s): Consultation internationale sur l'avenir de la métropole parisienne*. Le Moniteur. Paris. 2009.
- 10 「セーヌ川流域」公式サイト <https://www.vdseine.fr/demarche/> (2022年3月31日最終閲覧)。またBilley et al. (dir.) 2021も参照のこと。
- 11 フーコーの系譜学が「反社会理論的な社会理論」であるという点は留意する必要がある。つまりそれは、特定の分析図式に沿って事象を記述することを拒否するものの、そのような拒否を通じて新たな記述法を探っているという点においては社会理論 (より正確に言えば特定の意図に基づく分析手法) である。なお、フーコーはだからといって系譜学において既存の社会理論の問題関心を無視せよと言っているわけではない。そうではなく、そのような社会理論の問題関心は、具体的な事象の系譜を探り当てる作業から派生的にしか解決し得ないということを主張している。
- 12 もちろん現実には、諸主体間の権力勾配は圧倒的であるケースも多く、その場合従来の権力観で問題が生じることはあまりない。ここで述べたいのは、そうした事例が必ずしも当てはまらないケースもあり得るだろうということである。
- 13 おそらく、この観点から積極的な読み直しが図られるべきなのは、マクファーレンが弁証法的アプローチと関係論的アプローチの折衷案を示したものとして引用した、ハーヴェイの *Justice, Nature, and the Geography of Difference* (Harvey 1996) であろう。
- 14 「人間と自然のあいだの物質代謝」をふまえた静脈産業 (特に自動車産業) の事例分析として、外川 (1998) がある。
- 15 1975年から1978年にかけてが、豊島の産廃処分地建設反対運動の第1期にあたる。詳細は大川 (2001) 等も参照されたい。
- 16 日本遺産ポータルサイト申請書類 せとうち備讃諸島日本遺産推進協議会「知ってる!? 悠久の時が流れる石の島」参照。
- 17 特に新潟・越後妻有の「大地の芸術祭」を展開するにあたって、鶴見の議論が参照されている。
- 18 徳田は、アートプロジェクトが「目的—手段」関係に陥らないように、社交空間を創出することの重要性、また「よそ者」の存在が介在することの重要性、そしてプロジェクトにおける空間的狭さの重要性を提起している。
- 19 広い意味での「採取—採掘」を考えるならば、「採取—採掘」研究の動向では、金融化、情報化を背景に、「文字通りの採取」を超えた採取を考察している。今回言及した瀬戸内国際芸術祭については、金融化や情報化を絡めた論点を提起することができなかった。

## 文献

- 浅野敏久・中島弘二 (2013)「自然の地理学——自然と社会の二元論を越えて」浅野敏久・中島弘二編『自然の社会地理』海青社, pp.13-37
- 荒又美陽 (2019)「パリのリスケーリングとメガイベント——グローバル化・脱工業化をめぐる都市計画とその課題」『駿台史学』166, pp.71-88
- 荒又美陽 (2020a)「グローバル・シティのオリンピック——脱工業化, リスケーリング, ジェントリフィケーション」『経済地理学年報』66, pp.29-48
- 荒又美陽 (2020b)「メガイベントと都市計画——東京とパリを例に」『観光学評論』8-2, pp.139-159

- 荒又美陽編 (2019)「翻訳特集 プラネタリー・ジェントリフィケーション」『空間・社会・地理思想』22, pp.125-211
- 荒山正彦・大城直樹編 (1998)『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院
- 上野千鶴子 (2002 = 2015)『差異の政治学』岩波書店
- 大川真郎 (2001)『豊島産業廃棄物不法投棄事件——巨大な壁に挑んだ二五年のたたかい』日本評論社
- 片岡一竹 (2017)『疾風怒濤精神分析入門』誠信書房
- 加藤政洋・大城直樹編 (2006)『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房
- 影山穂波 (2004)『都市空間とジェンダー』古今書院
- 北川真也・箱田徹 (2021)「〈提起〉採掘-採取, ロジスティクス——現代資本主義批判のために」『思想』1162, pp. 8-11
- 北川フラム (2015)『ひらく美術——地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房
- 杉本裕明 (2021)『産廃編年史50年——廃棄物処理から資源循環へ』環境新聞社
- 近森高明 (2021)「『都市』から『まち』へ——2000年代以降の都市記述の変容について」『年報社会学論集』34, pp.37-44
- 玉井亮子・待鳥聡史 (2016)「大都市との一体化による縮小都市生き残りの可能性——フランス, ル・アーヴル市」加茂利男・徳久恭子編『縮小都市の政治学』岩波書店, pp.51-77.
- 外川健一 (1998)『自動車産業の静脈部』大明堂
- 徳田剛 (2019)「地域とアートの“幸福な関係”はいかにして可能か? ——G. ジンメル アイデアを参考に」『フォーラム現代社会学』18, pp.138-48
- 中沢新一 (2011)『日本の大転換』集英社新書
- 花田達朗・吉見俊哉・スパークス, コリン編 (1999)『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社
- 林葉子 (2017)『性を管理する帝国—公娼制度下の「衛生」問題と廃娼運動』大阪大学出版会
- 原口剛 (2016)『叫びの都市——寄せ場, 釜ヶ崎, 流動的下層労働者』洛北出版
- 原口剛・平田周編 (2018)「翻訳特集 プラネタリー・アーバニゼーション」『空間・社会・地理思想』21, pp.95-167
- 平田周 (2022)「ニール・ブレナー『アーバニゼーション批判』」『現代思想』50-1, pp. 70-76
- 平田周・仙波希望編 (2018)「プラネタリー・アーバニゼーション——21世紀の都市学のために [前編]」『10+1 ウェブサイト』<https://www.10plus1.jp/monthly/2018/11/>
- 平田周・仙波希望編 (2019)「プラネタリー・アーバニゼーション——21世紀の都市学のために [後編]」『10+1 ウェブサイト』<https://www.10plus1.jp/monthly/2019/06/>
- 平田周・仙波希望編 (2021)『惑星都市理論』以文社
- 福武總一郎・北川フラム (2016)『直島から瀬戸内国際芸術祭へ——美術が地域を変えた』現代企画室
- 福田珠己 (2018)「ホームの地理学とセクシュアリティの地理学が出会うとき: 近年の研究動向に関する覚書」『空間・社会・地理思想』21, pp.29-35
- 町村敬志・西澤晃彦 (2000)『都市の社会学——社会がかたちをあらわすとき』有斐閣
- 松本康編 (2014)『都市社会学・入門』有斐閣
- ミヨシマサオ (2007)『抵抗の場へ——あらゆる境界を越えるために』聞き手: 吉本光宏, 洛北出版
- 吉田容子 (1996)「欧米におけるフェミニズム地理学の展開」『地理学評論 Ser. A』69-4, pp. 242-262
- 吉見俊哉 (1987)『都市のドラマトロジー』弘文堂
- 寄藤晶子 (2012)「フェミニスト地理学の射程と課題」『松本大学研究紀要』10, pp.235-256
- Adey, P. (2010) *Aerial Life: Spaces, Mobilities, Affects*. West Sussex, UK: Wiley-Blackwell.
- Arboleda, M. (2020) *Planetary Mine: Territories of Extraction under Late Capitalism*, Verso.
- Attoh, K. (2011) What kind of right is the right to the city?, *Progress in Human Geography*, 35 (5), pp.669-85.
- Augé, M. (1994) *Non-lieux: introduction à une anthropologie de la surmodernité*, Paris, Seuil. [= (2017) マルク・オジェ (中川真知子訳)『非-場所——スーパーモダニティの人類学に向けて』水声社]

- Billè, F. ed. (2020) *Voluminous States: Sovereignty, Materiality, and the Territorial Imagination*. Durham NC: Duke University Press.
- Balibar, É., Monod, J.-C. et Revault d'Allonnes, M. (2019) « Le concept de totalitarisme est-il encore pertinent ? », propos recueillies par Fœssel, M., Lacroix, J. *Esprit*, Janvier-Février, 83-98.
- Billey, J, Fesquet, A, Jacquin, A, et Pernet, A (dir.) (2021) *Plus grand que la Seine: Acteurs en réseau, Paysages en projets*, Parenthèses.
- Brenner, N. (2004) *New State Spaces: Urban Governance and the Rescaling of Statehood*, Oxford University Press.
- Brenner, N. (2016a) The Hinterland Urbanised?, *Architectural Design*, 86 (4), pp.118-127.
- Brenner, N. (2016b) Urban revolution?. In N. Brenner, *Critique of Urbanization: Selected Essays*. Basel: Birkhäuser. pp.192-211. [= (2018) ニール・ブレナー (平田周, 仙波希望訳)「都市革命?」『空間・社会・地理思想』, 大阪府立大学・大阪市立大学, 21, pp.115-125]
- Brenner, N. (2018) Debating planetary urbanization: For an engaged pluralism, *Environment and Planning D: Society and Space*, 36 (3), pp.570-590.
- Brenner, N. and Schmid, C (2012) Planetary Urbanization, In. Gandy, Matthew (ed.), *Urban Constellations*, Jovis, pp.10-13. [= (2018) ニール・ブレナー, クリスチャン・シュミット, (平田周訳)「プラネタリー・アーバニゼーション」『空間・社会・地理思想』 21, pp.103-106]
- Brenner, N. and Katsikis, N. (2020) Operational Landscapes: Hinterlands of the Capitalocene, *Architectural Design*, 90 (3), pp.22-31.
- Chakrabarty, D. (2000) *Provincialising Europe*, Routledge.
- Chakrabarty, D. (2021) *The Climate of History in a Planetary Age*, University of Chicago Press.
- Clark, N.H., and Szerszynski, B (2020) *Planetary Social Thought: The Anthropocene Challenge to the Social Sciences*, Polity.
- Cowen, D (2014) *The Deadly Life of Logistics: Mapping Violence in Global Trade*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Da Veiga, L (2021) Saint-Denis : la justice enterre le projet d'aménagement de la ZAC Pleyel, *Les Echos*, le 31 déc. 2021.
- Dyer-Witheford, N. (1999) *Cyber-Marx: Cycles and Circuits of Struggle in High-technology Capitalism*. Urbana, IL University of Illinois Press.
- Dyer-Witheford, N. (2018) Struggles in the planet factory: Class composition and global warming. In j. jagodzinski, ed. *Interrogating the Anthropocene: Ecology, Aesthetics, Pedagogy, and the Future in Question*. London: Palgrave Macmillan. pp.75-103.
- Deleuze, G. (1986) *Foucault*, Paris: Minit. [宇野邦一訳 (1987) 『フーコー』 河出書房新社]
- Elden, S. (2013) Secure the volume: Vertical geopolitics and the depth of power. *Political Geography* 34, pp.35-51.
- Enright, T. (2016) *The Making of Grand Paris: Metropolitan Urbanism in the Twenty-First Century*, Cambridge: MIT Press.
- Foucault, M. (2004) "Naissance de la biopolitique" *Cours au Collège de France 1978-1979*, Paris: Gallimard. [慎改康之訳 (2008) 『生政治の誕生 — コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979 年度』 筑摩書房]
- Friedmann, J (1986) The World City Hypothesis, *Development and Change*, 17 (1), pp.69-83. [= (2000) ジョン・フリードマン (町村敬志訳)「世界都市仮説」 町村敬志編『都市社会学セレクション3 都市の政治経済学』 日本評論社]
- Gago, V. (2019) Cuerpo-territorio: el cuerpo como campo de batalla. In V. Gago, *La potencia feminista: O del deseo de cambiarlo todo*. Madrid: Traficantes de sueños. pp.95-124. [= (2021) ベロニカ・ガーゴ (石田智恵訳)「身体-領土 — 戦場としての身体」『思想』 1162, pp. 32-59]
- Gallo Lassere, D. (2022a) Welcome to the Past. Autonomy of Nature, Fossil Fuels and the Capitalocene. <https://>

- www.versobooks.com/blogs/5378-welcome-to-the-past-autonomy-of-nature-fossil-fuels-and-the-capitalocene
- Gallo Lassere, D. (2022b) Back to the present. Global Spaces, Pandemic crises and Ecological Counter-Powers. <https://www.versobooks.com/blogs/5381-back-to-the-present-global-spaces-pandemic-crises-and-ecological-counter-power>
- Gilmore, R. W. (2022) *Abolition Geography: Essays Towards Liberation*, Verso.
- Graeber, D (2015) *The Utopia of Rules: On Technology, Stupidity, and the Secret Joys of Bureaucracy*, Melville House. [= (2017) デヴィッド・グレーバー (酒井隆史訳)『官僚制のユートピア——テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』以文社]
- Graham, S. (2016) *Vertical: The City from Satellites to Bunkers*. London: Verso.
- Gregory, D. (1994) *Geographical Imaginations*, Blackwell.
- Gregory, D. (1999) Lacan and geography: The Production of Space revisited, in Benko, G. & Strohmayr, U. eds. *Space and Social Theory: Interpreting Modernity and Postmodernity*, Blackwell, pp.203-231 [= (2011) グレゴリー, D. (大城直樹訳)「ラカンと地理学——空間の生産再考——」, 『空間・社会・地理思想』14, pp.103-123.
- Grosz, E (1992) Voyeurism/exhibitionism/the gaze, In Elizabeth Wright ed., *Feminism and Psychoanalysis: A Critical Dictionary*, Blackwell, pp.447-50
- Hardt, M. and Negri, A. (2009) *Commonwealth*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [= (2012) アントニオ・ネグリ, マイケル・ハート (水嶋一憲監訳, 幾島幸子・古賀祥子訳)『コモンウェルス (上・下)』NHK出版]
- Harvey, D. (1989) *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Basil Blackwell [= (1999=2022) デヴィッド・ハーヴェイ (吉原直樹監訳)『ポストモダニティの条件』青木書店]
- Harvey, D. (1996) *Justice, Nature and the Geography of Difference*, Oxford: Blackwell.
- Jackson, P. (1989) *Maps of Meaning*, Routledge. [= (1999) ピーター・ジャクソン (徳久球雄・吉富亨訳)『文化地理学の再構築——意味の地図を描く』玉川大学出版部]
- Jameson, F. "Postmodernism and consumer society" in Foster, H. (1983) *The Anti-Aesthetic: Essays on Postmodern Culture*, Bay Press [= (1987) フレドリック・ジェームソン「ポストモダニズムと消費社会」, ハル・フォスター編 (室井尚・吉岡洋訳)『反美学：ポストモダンの諸相』勁草書房, pp.199-230]
- Knox, P. and Pinch, S. (2010) *Urban Social Geography: An Introduction*, 6th Edition, Routledge. [= (2013) ポール・ノックス, スティーヴン・ピンチ (川口太郎・神谷浩生・中澤高志訳)『改訂新版 都市社会地理学』古今書院]
- Kohso, S. (2020) *Radiation and Revolution*, Durham, NC: Duke University Press.
- Kontos, M. (2022) Temps, démocratie et justice environnementale dans la fabrication urbaine des Jeux Olympiques et Paralympique Paris 2024. Ce que révèle la mobilisation des habitants et collectifs de Seine – Saint – Denis. In *Après la révolution*, Hors – Série <JO Paris 2024. Carnets de luttes>, Saint – Etienne, Riot éditions, janvier 2022, pp.11-18.
- Labban, M., 2014, "Deterritorializing Extraction: Bioaccumulation and the Planetary Mine", *Annals of the Association of American Geographers*, 104 (3), pp.560-76.
- Latour, B. (2005) *Reassembling the Social: An Introduction of Actor-network-theory*. Oxford University Press.[= 伊藤嘉高訳 (2019)『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク入門』法政大学出版局.]
- Lees, L., Shin, H. B., López-Morales, E. (2016) *Planetary Gentrification*, Polity.
- Lefebvre, H. (1974) *La production de l'espace*, Paris, Anthropos. [= (2000) アンリ・ルフェーヴル (斎藤日出治訳)『空間の生産』青木書店]
- Lefebvre, H. (2000 [1972]) *Espace et Politique*, Paris, Anthropos, 2e édition. [= (1975) 今井成美訳『空間と政治』晶文社]
- Lefebvre, H (1989) Quand la ville se perd dans une metamorphose planétaire", *Le Monde diplomatique*, 1 mai 1989. [= (2018) アンリ・ルフェーヴル, (平田周訳)「地球の変貌」『空間・社会・地理思想』21, pp.99-101]

- Lefort, Claude. (1986) « Les droits de l'homme et l'État-providence », *Essais sur le politique*, Paris, Seuil, pp.33-63.
- Leonardi, E. (2017) Neo-operaismo e decrescita. Aprire un percorso di riflessione.  
<http://effimera.org/neo-operaismo-e-decrescita>
- Leonardi, E. (2021) *Autonomist Marxism and World-Ecology: Nick Dyer-Witheford Interviews Emanuele Leonardi*.  
<https://projectpppr.org/pandemics/vv28ivjg8ux4uo5qzy8qav9cl0gs3g>
- McNeill, J. R. and Engelke, P. (2014) *The Great Acceleration: An Environmental History of the Anthropocene Since 1945*. Cambridge, MA: Belknap.
- Malm, A. (2016) *Fossil Capital: The Rise of Steam Power and the Roots of Global Warming*. NY: Verso.
- Malm, A. (2021) *How to Blow Up a Pipeline: Learning to Fight in a World on Fire*, London, Verso. [= (2022) アンドレアス・マルム (箱田徹訳) 『パイプライン爆破法——燃える地球でいかに闘うか』月曜社]
- Merrifield, A. (2011) The Right to the City and Beyond: Notes on a Lefebvrian Re-Conceptualization, *City*, 15, 3-4, pp.468-476. [= (2018) アンディ・メリフィールド, (小谷真千代・原口剛訳) 『都市への権利とその彼方—フェーブルの再概念化に関するノート』『空間・社会・地理思想』21, pp.107-114]
- Mezzadra, S. and Neilson, B. (2017) "On the multiple frontiers of extraction: excavating contemporary capitalism", *Cultural Studies*, 31 (2-3), pp.185-204. [箱田徹訳 (2021) 『多数多様な採取フロンティア——現代資本主義を掘り起こす』『思想』1162, pp.12-31]
- Mezzadra, S. and Neilson, B. (2019) *The Politics of Operations: Excavating Contemporary Capitalism*. Durham NC: Duke University Press.
- Moore, J. W. (2015) *Capitalism in the Web of Life*, Verso. [= (2021) ジェイソン・W・ムーア (山下範久・滝口良訳) 『生命の網のなかの資本主義』東洋経済新報社]
- Negri, A. e Tomasello, F. (2014) *La Comune di cooperazione sociale: intervista ad Antonio Negri sulla metropoli*.  
<http://www.euronmade.info/?p=2185> [= (2018) アントニオ・ネグリ, フェデリーコ・トマゼット (北川眞也訳) 『社会的協働のコミュニケーション——アントニオ・ネグリへの〈大都市〉についてのインタビュー』『空間・社会・地理思想』21, pp. 127-140]
- Nelson, S. and Braun, B. (2017) Autonomia in the Anthropocene: New challenge to radical politics. *South Atlantic Quarterly* 116, pp. 223-235.
- Orfeuil, J-P et Wiel, M (2012), *Grand Paris : Sortir des illusions, approfondir les ambitions*, Scrineo.
- Peck, J (2015) Cities beyond Compare?, *Regional Studies*, 49 (1), pp.160-182.
- Robinson, J (2004) In the tracks of Comparative Urbanism: Difference, Urban Modernity and the Primitive, *Urban Geography*, 25 (8), pp.709-723.
- Roy, A (2003) *City Requiem, Calcutta: Gender and the Politics of Poverty*, University of Minnesota Press. Storper, M and Scott, A. J (2016). Current Debates in urban Theory: A Critical Assessment. *Urban Studies*, 53 (6), pp.1114-1136.
- Sassen, S (1991) *The Global City*, Princeton University Press. [= (2008=2018) サスキア・サッセン (伊豫谷登士翁監訳) 『グローバル・シティ』筑摩書房]
- Scott, A. J, and Storper, M (2015) The Nature of Cities: The Scope and Limits of Urban Theory, *International Journal of Urban and Regional Research*, 39 (1), pp.1-15.
- Scott, W. J. (1988) *Gender and the Politics of History*, Columbia University Press. [= (1992) ジョーン・スコット (萩野美穂訳) 『ジェンダーと歴史学』平凡社]
- Sheppard, E, Leitner, H. and Maringanti, A. (2013) Provincializing global urbanism: a manifesto, *Urban Geography*, 34 (7), pp.893-900.
- Smith, N (1993). Homeless/Global: Scaling places. In Bird, J, Curtis, B, Putnam, T G, Robertson, G, Tucker, L (eds.) *Mapping the Futures: Local Culture, Global Change*, 87-119, London: Routledge.

- Smith, N (1984=2008) *Uneven Development: Nature, capital, and the Production of Space*, Third Edition, The University of Georgia Press.
- Steinberg, P. and Peters, K. (2015) Wet ontologies, fluid spaces: giving depth to volume through oceanic thinking. *Environment and Planning D: Society and Space* 33, pp.247-264.
- Storper, M. and Scott, A. J. (2016) Current debates in urban theory: A critical assessment. *Urban Studies*, 53(6), pp.1114-1136.
- Toscano, A and Kinkle, J (2015) *Cartographies of the Absolute: An Aesthetics of the Economy for the Twenty-first Century*, Zero Books.
- Weizman, E. (2007) *Hollow Land. Israel's Architecture of Occupation*. London: Verso.
- Zibechi, R. (2018) Raúl Zibechi: «Dagli zapatisti ai NoTAV, lotta globale all'estrattivismo». <https://www.dirittiglobali.it/2018/08/raul-zibechi-dagli-zapatisti-ai-notav-lotta-globale-allestrattivismo>